慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世における本地物の研究(八) : 毘沙門の本地・ 梵天国
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.45- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世における本地物の研究（八）

――毘沙門の本地・梵天国――

松本隆信

毘沙門の本地

「毘沙門の本地」の伝本には次の諸本がある。（各本下部の〈　〉内は本稿で使用する略号）

○ひしやもんの本地（題簽）〔江戸前期〕写　奈良絵本　半三帖　反町茂雄氏旧蔵（室町時代物語集第二所収）〈反町〉

○千歳王物語（後題簽）中欠　〔江戸前期〕写　奈良絵本　横二冊　早稲田大学図書館蔵　〈早大〉

○ひしやもんの本地（題簽）〔江戸前期〕写　絵巻　三軸　高野山大学図書館蔵　〈高野山〉

○大わうひめ（題簽）〔江戸前期〕写　絵巻　三軸　ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション蔵　〈SP〉

○ひしやもん（題簽）〔江戸初期〕写　奈良絵本　横三冊　慶應義塾図書館蔵（室町時物語大成第十一・影印室町物語集成第五輯所収）　〈慶應甲〉

○ひしやもん（尾題）〔江戸前期〕写　大一冊　慶應義塾図書館蔵（室町時代物語大成第十一所収）　〈慶應乙〉

○ひしやもんのほんし（扉題）〔江戸後期〕写　半三冊　名古屋市立図書館旧蔵　〈名古屋〉

○ 毘沙門天王之本地（内題）　承応三年刊　絵入　大三冊
慶應義塾図書館・東京大学霞亭文庫蔵（室町時代物語集第二・室町時代物語大成第十一所収）　〈刊本〉

以上のほか、明治以後の活字翻印で、底本の明示されていないものに、次の諸書に掲載された本がある。

○ 新編御伽草子（萩野由之編、明治三十四年）所収本
○ 校注日本文学大系第十九巻（尾上八郎編、大正十四年）所収本
○ 新釈日本文学叢書第二輯第七巻「御伽草子集」（内海弘蔵編、昭和五年）所収本
○ 岩波文庫「お伽草子」（島津久基編、昭和十一年）所収本
○ 雄山閣文庫「御伽草子二」（昭和十四年）所収本
○ 東洋学芸雑誌第八十一・八十二・八十四・八十六・八十七号所収本

新編御伽草子本以下、雄山閣文庫本までの五本は、全く同一の本文を有する。新編御伽草子本に、以下の四本は拠ったのではないかと思われるので、同書を以て五本を代表させ、〈新編〉の略号を用いることとする。また、東洋学芸雑誌所収本については、冒頭に「此書ハ予ガ嘗テ坊間ニテ購ヒタル絵本古物語ニシテ、其絵タルヤ土佐派ノ極彩色ニテ合色極メテ妙ナリ（中略）因テ之ヲ本誌ニ掲ケ同好ノ諸士ニ示ス、但シ文字ハ原書ハ首トシテ平仮名ヲ用フレトモ、今多ク漢字ヲ塡入シテ通読ノ便ニ供ス　青萍逸人識」とある。すなわち、末松謙澄氏が架蔵の奈良絵本を底本とした翻印である。よって、略号には〈末松〉を用いることとする。

上記の諸本を本文によって類別すると、次のようになる。

A類
　第一種　(イ)〈反町〉〈早大〉〈新編〉
　　(ロ)〈高野山〉
　　(ハ)〈SP〉
　第二種　〈慶應甲〉〈末松〉
B類　〈名古屋〉
C類　〈慶應乙〉
D類　〈刊本〉

以下、類別した各系統の本文の関係について述べる。

A類諸本

A類とした七本には、同じ個所に、やや長い脱文が共通して

見られることから、同一の祖本より分岐した本であることが明らかである。

第一種(イ)の三本は、語句の末に所々僅な相違がある程度で、たがいに誤脱の字を補い合うことができる。〈反町〉と〈早大〉は上中下の巻分けの個所も一致し、〈早大〉は〈反町〉の中巻に当る一冊を欠いている。〈新編〉は三本のうち、最も誤脱が多く、善本とはなし難い。従って、この三本の中では〈反町〉を以て代表せしめるのが適当と思われる。なお〈反町〉と〈早大〉の挿絵について見ると、上巻は〈反町〉の六図のうち、第五図までは、挿入個所が〈早大〉も一致し、第六図の所は〈早大〉は片面が白紙になっている。下巻は、〈反町〉に五図、〈早大〉に七図の挿絵があるが、そのうちの四図は二本の位置が一致し、二図は〈早大〉にあって〈反町〉に無く、一図は位置が少しく違っていて、完全には合致しない。ところが〈早大〉の挿絵は、第二種の〈慶應甲〉と較べると、上巻と下巻に関する限り、挿入されている位置も、描かれている情景も、全く一致する。構図も、左右が反対になっている個所は多いが、かなり近似しているのである。このことは、第一種本と第二種本との関係を推測する上で、本文と共に問題になるであろう。

次に、第一種の(ロ)〈高野山〉と(ハ)〈SP〉の二本も、基本的には、(イ)〈反町〉と同系統の本文であることが認められるが、部分的に異文の個所がかなり多く見られる。主な個所を挙げてみる。

(例1)

〈反町〉 むかしてんちくに国あり、なをはくる国とそ申ける、そのくにゝ、わう一人おはします、御なをは、せんさいわうとそ申ける、よろづめでたき事、人にすぐれておはします、ときにしたかひて、たからのふる事、あめのごとくなり、A いづれも一てんかに、おろかなることおはせとも、これをためしすくなき事にて申ける、B あめしたになひかぬくさ木もなし、C たから日にしたかひてふりくたり、しろかねこかねのついちに、こかねのとひらをたて、にはには、こんくるりをしき、こかねのゐさこをちりはめ、せんすいのこたちは、E ひかりをましへたるこゝちして、F おもしろき事申はかりなし、大りには、わしのはたかのはにて、G ゑんしちつくにそふかれたり、こかねのかわらに、しろかねのゆかをならへ、にしきのきちやうをたてられたり、百八十けんのたまのみすに、こかねのてんを百廿ちやうにくまれたり、そのうちに、一万人のくき

やう大しん、三千人の女はうたち、H いねうせられておはしますありさま、ためしすくなくこそみへさせ給ふ

〈高野山〉 むかしてんちくにくにあり、名をはくるこくとそ申ける、その国のわう一人そおはします、御名をは、せんさいわうとそ申ける、よろつめてたき事、人にすくれておはします、時にしたかひて、たからのふること、雨のことくなり、A いつれも一てんかに、をろかなる事おはせす、是をためしすくなきことにそ申ける、B あめかしたになひかぬ草木もなく、C たからは日にしたかつてふりくたり、白かねこかねのつゐちをつき、こかねの戸ひらをたて、庭には、こんくるりをしき、こかねのいさこをちりはめ、せんすいの木立は D 空にのほり、E ひかりをましへたる心ちして、F おもしろき事中〻申はかりもなし、たいりには、わしの羽たかのはにて、G えんしつ作にそふかれたり、金のかはらに、白かねの床をならへ、錦の木丁を立られたり、百八十けんの玉のみすに、こかねのてんを百廿ちやうにくまれたり、そのうちに、一万人のくきやう大臣、三千人の女房たち、H いねうかつかうせられておはしますありさま、ためしすくなくそみえさせ給ひける

〈SP〉 むかしてんちくに国あり、名をはくるこくとそ申ける、そのくに〻、御かと一人おはします、御名をは、せんさいわうとそ申ける、よろつ目出度事、人にすくれておはします、時にしたかひて、たからのふること、雨のことくなり、A いつれも、B 国民草木まて、なひかぬものはなかりけり、さるにより、しろかねのついちに、こかねの門をたて、庭には、こんくるりをしき、こかねのいさこをちりはめ、まことに、せんすい木たちまて、F こゝろもことはもおよはれす、たとへていはんかたもなし、たいりのうへをは、わしたかはにてそふかれたり、こかねのかはら、しろかねのゆかをならへ、にしきのきちやうをたてられ、百八十けんのたまのみすに、こかねのてんを百二十ちやうにくまれたり、そのうちに、一まんにんのくきやう大臣、三千人の女はうたちそおはします、御有さま、ためしすくなくそ見えさせたまふ

右の傍線AからHまでの八個所以外は、三本共にほとんど同文である。異なる部分について見ると、BFHは〈反町〉〈高野山〉の二本は一致するのに対して、〈SP〉だけが異なっている。また、ACEGも〈SP〉だけは相当する語句を欠いている。〈高野山〉だけが異なるのはDで、この語句は〈反町〉〈SP〉には無い。この一節に関しては、〈反町〉〈高野山〉はきわ

めて近く、〈SP〉のみが独自の文章を有している。しかし〈反町〉と〈高野山〉の間にも問題にすべき個所がある。Aの文において、〈反町〉の「おろかなることおはせとも」が、〈高野山〉では「をろかなる事おはせす」とあって、意味が反対になっている点である。これは、どちらでも文意は通るのであるが、第二種本の〈慶應甲〉を見ると、この個所は「いつれも一天下には、をろかなる事もおはせし物なれとも、これをはためしすくなき事にそ申ける」とあって、〈反町〉と同意の文である。この所は前後の文脈から考えて、〈反町〉や〈慶應甲〉のように「いくらめでたいといっても、何かの欠点はあるものだけれども」の意が本来であったと思われるが、表現が明確でなかったために〈高野山〉が誤ったのであろう。〈SP〉が「いつれも」の一語だけ残しながら、以下の一文を欠いているのも、文意をはかりかねたためかもしれない。また、Gの「ゑんしちつく」「えんしつ作」も、意味のよくわからない語である。これも〈慶應甲〉には「ゑんしちつくり」と出ている。〈新編〉は「宴室造り」と宛てているが、その意味かどうかは疑問である。この語が〈SP〉に欠けているのも、意味がわからなかったためではなかろうか。

（例2）

〈反町〉　さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むらくも一むらA ひきおほひけり、ひめみや御らんして、あはれ、まやこくよりうかする（ママ）せいやらんと、おほしめして、D かくそのたまふ

あまつそら、くものかよひち、ふみわけて、月ならすして、
たれかゆくらん

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍るくものやうかなとのたまへは、むらくものたちより、人おりくたり、かくなん

七夕の、くもいのそらに、すむ水の、きみゆへいまは、おちまさるかな

とて、おちくる人をみたまへは、E とし十七八はかりなる人なり、御なをしのいつくしきに、くれなゐのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさね、ゆゝしくひんつらふきなかしたまひたるやう、たゝ人ともおほへす見へさせたまひけるか、G のたまひしは、君はいかなる人にてましませは、H 御こゑそらのくもまて、めてたくきこへさせたまへは、I おもひのほかにあまくたるなりと、おほせありけれは、ひめみやのたまふやう、

我はこれ、くるこくの大わうのに(ママ)、てん大たまひめといふなり

〈高野山〉 さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むら雲一むらたな引おほひきたり、姫宮のかたへなひきけり、宮御らんして、あはれまやこくよりよする勢やらん、おほつかなしとおほしめして、こゝろほそくも、かくそよみ給ふ

天つ空、雲のかよひち、ふみわけて、月ならすして、誰か行らむ

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍る雲のけしきかなとのたまへは、むら雲の中より、人おりくたり、かくなん

たなはたの、雲のそらには、すむみつの、君ゆへ今は、おちまさるかな

とて、おちくる人をみたまへは、としのよはひ十七八はかりなる人の、御なふしのいつくしきに、くれなゐのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさねき、ゆゝしきひんつらふきなかし給ひたるけしき、たゝ人ともおほえぬよそほひにてみえさせ給ひけるか、かくの給ふは、いかなる人にてましませは、雲の中より御こゑきこえ、めてたき御すかたにてきこえさせたまへはとの給へは、かの人、おもひのほかにあまくたるなりと、おほせありけれは、ひめ宮こたへ給ふやう、身つからはこれ、くるこくの大わうの、てんたい玉姫といふなり

〈SP〉 さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むらくも一むらひきおゝひけり、ひめみや御覧して、あはれ、まやこくよりよするせいやらんと、おほしめして

あまつ空、くものかよひち、ふみ分て、月ならすして、たれかゆく覧

となかめ給ひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍るくものやうかなとの給へは、むらくものうちより、人おりくたり、かくなん

七夕の、雲井のそらに、すむみつの、きみゆへ今は、おちまさる哉

とて、おちくる人をみ給へは、年十七八はかりなる人なるか、御なをしのいつくしきに、くれなゐのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさね、ゆゝしくひんつらふきなかし給ひたるやう、たゝ人ともおほえす見えさせ給ひけるか、の給ひしは、

きみはいかなる人にてましませは、御こゑそらのくもまて、H
めてたくきこえさせたまへは、おもひのほかにあまくたるなI
りと、おほせありけれは、ひめみや、の給ふやう、我はこれ
くるこくの大わうの姫みや、大玉姫とこたへさせます

この一節では（例文1）とは逆に、ABCEFのように、〈高野山〉だけが異なる個所が多い。また、GHIも〈反町〉と〈SP〉は一致し、〈高野山〉のみに違いが見られるが、この個所は文意に問題がある。〈反町〉〈SP〉では、Gの「のたまひしは」の主語は、天空から降ってきた金色太子で、HもIも太子の言葉になっている。一方〈高野山〉では、Gが「かくの給ふは」とあるので、ここから会話の言葉となり、その主語は前文からの続きからすれば太子である。しかし、後文への続きを見ると、Hの終りに「との給へは」が、Iの初めに「かの人」の二語が入っているので、Iの部分が太子の言葉となり、GからHへかけての部分は姫宮の言葉と解さなければならなくなる。〈反町〉〈SP〉の方も、GHの間の「君はいかなる人にてましませは」と、次のHとの続きぐあいはなめらかでなく、脱文があるのではないかとも思われるが、〈高野山〉の文脈の錯雑は、それと関連するのかもしれない。この部分は第二種の〈慶應甲〉では次のようになっている。

〈慶應甲〉 かくてその人をみ給へは（中略）たゝ人ともおほえす見えさせ給ふほとに、ひめ君おほせけるやうは、いかなる人にて侍れは、かやうにあまくたり給ふそと、おほせけれは、御ことこそ、いかなる人にてわたらせ給へは、御こゑ雲ゐまて、めてたくきこえ侍れは、おもひのほかにくたる也と有しかは

この文では、姫君と太子との間で交された会話として、はっきり区別して述べられている。この場面では、このように天空から降ってきた太子を見て、姫君がまず問い、太子が答えるというのが、自然な運びであろう。第一種の諸本も、本来は〈慶應甲〉のような本文であったのが、脱文を生じたのではなかったかと考えられる。

（例3）

〈反町〉 さてひめみやは、くるこくへおもひのほかかへり給A
ふ、人々さはきあへる、大わう、いそきとひ給へは、御とも B C
の人々、此よしありのまゝ申、大わうきこしめして、さては、 D
大わうまことの道にいりたまふやと、ひめみやにちきりをむ
すひ給ふゆへにやとて、御なみたをなかさせおはします、ひ

めみやかへらせおはします事、御よろこひかきりなし、[F]御よろこひのなかにも、ひめみやは、[H]大子にちきり給ふとし月もかさならぬに、[I]日にそへて恋しく、[J]はるかなる道のほと、いたはしくそおほしめし、[K]袖のひるまもおはしまさす

〈高野山〉　さても姫宮は、くるこくさしてかへり給ふに、人〳〵さはきあへり、[B]そのとき、ちゝ大わうも、御はゝきさきも、夢の心ちし給ひて、しはしありてとひたまへは、[C]御とものの人〳〵、このよしありのまゝに、大わうへそうもんしけれは、大わう聞しめして、[D]さては、まことのみちにいりたるそや、姫宮も太子に契をむすふことよとて、御なみたをなかさせおはします、ひめみやかへらせおはします、御よろこひはかきりなし、[G]さるほとに、ひめみやは、太子にいとかりそめの契りゆへに、かへりおはしましけるか、[H]太子にわかれ給ふとし月もかさなり給ふにつけて、[I]日にそへて恋しく、[J]はるかなるみちのほとをも、いたはしくて、明暮思ひくらしおほしめし、[K]御袖のしからみも、ひるまもなくおはしまさす

〈SP〉　さてひめみやは、くるこく[A]おもひのほかにかへり給ふ、人〳〵さはきたまひけり、[B]ことのよしを大わう、いそきとはせたまへは、[C]御とものの人〳〵、つふさにそうもんある、みかときこしめして、[D]さては太子、ことのみちにいりたまふや、これもひとへに、姫宮にちきりをむすひたまひしゆへにやとて御なみたをなかさせおはします、[E]とにふれかくにつけても、ひめ宮のかへらせたまひし事の目出度さよと、御よろこひかきりなし、[F]かゝる中にも、姫みやは、[I]太子の御なを恋しくおほしめし、[J]まことにはるかなるみちをゆき給はん事のかなしやと、[K]御そてのかはくひまはなかりけり

この一節は、三本の間で異同のある個所が多く、〈反町〉と〈高野山〉が一致し〈SP〉だけが異なる所—EHI、〈反町〉と〈SP〉が一致し〈高野山〉だけが異なる所—AFG、三本それぞれに少しずつ違う所—BCDJK、が交錯している。ただ、〈高野山〉と〈SP〉が同じで〈反町〉だけの異なる個所は見られない。このことは、〈反町〉系統の本文を基礎にして、〈高野山〉と〈SP〉とは、それぞれ独自に本文を改変したことを示すものと考えてよいであろう。また、この一節の〈慶應甲〉の本文を見ると

〈慶應甲〉　さて姫宮は、くるこくへ思ひのほかにかへり給へは、人〳〵さはきけり、大わう、いそきとひ給へは、御とものの人〳〵、しか〳〵の事、ありのまゝに申けれは、大王きこし

めして、D さては、大わうまことの道に入給ふやと、姫みやに契をむすひ給ひしゆへにやと、御なみたをなかさせおはします、さても、ひめみやかへらせ給ふ事、御よろこひはかきりなし、されとも、ひめみやは、たいしに契給ひて、いまたとし月もかさならさるに、日にそへてこひしく、はるかなるみちのほと、いたはしくおほしめし、袖のひるまもおはしまさす

とあって、〈高野山〉や〈SP〉よりも〈反町〉にきわめて近い。とくに、Dのような文意が明瞭でない個所まで一致しているのは、〈慶應甲〉もまた、〈反町〉系の本文と密接していたことを窺わしめる。

（例4）

〈反町〉 さても、のりたまへるりう、たへかねてふしぬ、そのときたいし、御なみたをなかしたまひ、いかにやなんち、ちくしやうなりといふとも、我このみちにまよふへきよしを、よにうれしけにてありしにより、おもひたちぬるみつからを、何となれとおもふそ、たとひこらへかたくとも、これまてきたるに、ことにでうやのやみに、すてをくへきかとて、くれないのなみたをなかし給ふ、りうも、きなるなみたをなかしけり、まことに御いたはしく候へは、おくりつけまいらせんとは、おもひまいらせ候へとも、りうは三ねんかはね、いきとまるならいなり、はらすちきれて、いきとまりとて、よにくるしけにて見へけれは

〈高野山〉 さても、のり給へるりうめ、たへかねてふしぬ、其時たいし、御涙をなかし給ひ、いかにやなんち、ちくしやう也といふ共、我この道に迷ふへきよしを、世にうれしけにてありしにより、思ひ立ぬる身つからを、何となれと思ふそ、たとひこらへかたくとも、是まて来るに、ことにちやうやのみちに、捨をくへきかとて、紅の泪をなかし給ふ、りうめも、きなるなみたをそなかしける、B そのときりうめ、物を申けり、まことに御いたはしく候て、をくりつけ参らせたく候へとも、りうめは三年かはね、いきとまるならひなり、はらすちきれて、行とまるとて、世にくるしけにてみえけれは

〈SP〉 さて、のりたまへるりう、たえかねふしにけり、そのとき太子、御なみたをなかさせ、いかにやなんち、ちくしやうなりといふとも、われこのみちにまよふをも、よにもうれしけにてありしにより、おもひたちぬるみつからを、なにとなれとかおもふそや、たとへはこらへかたくとも、これま

てきたり、そのうへちやうやのやみに、すてをくへきかと、くれなゐのなみたをなかしたまふ、りうも、きなるなみたをそなかしける、B そのときりう、ものを申けり、まことに御いたはしく候へは、をくりとゝけまいらせんどおもへとも、りうは三ねんかはねは、いきとまるならひなれは、はらすちきれて、いきとまり候とて、よにもくるしけに見えにける

この一節は、Aの「りう」と「りうめ（竜馬）」のような違いがあるだけで、三本共にさして変っていない。しかし、Bの一文は〈反町〉にだけ欠けていて、（例3）までに見られなかった異同の関係である。ここでは〈反町〉から〈高野山〉〈SP〉が分岐したとは言えなくなるのであるが、この個所は〈新編〉にも「その時竜、物を申しける」の句が入っており、〈慶應甲〉も「りうも、きなるなみたをなかして、物を申けり」とある。（〈早大〉は中巻欠のため不明）。従って、ここは〈反町〉単独の脱文であって、〈高野山〉や〈SP〉は〈反町〉の上位にある本から分岐したものと見てよいであろう。

（例5）

〈反町〉 ひしやもんてんわうとあらはれて、よろつの人の、ふくをねかはんときは、此はこのふたをあけ給ふへしとて、三つあるはこのなかに、すこしちいさきをとりいたし、太子にたてまつり給ふ、一さいしゆしやうのねかはん時は、これをまきたまへと、おほせけれは、ひめみやも太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

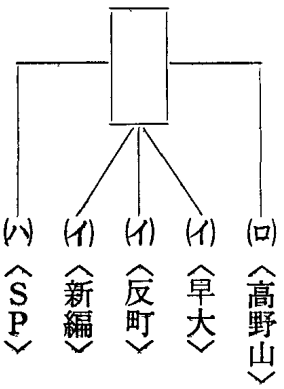
〈高野山〉 ひしやもん天王とあらはれて、よろつの人の、ふくをねかはんときは、この筥のふたをあけ給ふへしとて、三つあるはこの中に、すこしちいさきをとりいたし、太子にたてまつり給ふ、A ひめ宮は、ひきやうの玉を奉り給ふ、一さいしゆしやうのねかはん時、これをまきたまへは、ひめ宮も太子、よろこひ給ふことかきりなし

〈SP〉 ひしやもんてんわうあらはれて、よろつの人の、ふくをねかはんときは、此はこのふたをあけ給ふへしとて、三つあるはこのなかに、すこしちいさきをとりいたし、太子にたてまつりたまふ、A 姫宮は、ひきやうのたまをたてまつり給ふ、一さいしゆしやうのねかはんときは、これをまきたまへと、おほせけれは、ひめみやも太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

この一節でも、Aの一文は〈反町〉にだけ欠けている。しかし、ここも〈新編〉〈早大〉〈慶應甲〉の諸本は、いずれもAを備え

ているので、（例4）のBの場合と同じに考えることができる。ただし、〈早大〉〈高野山〉〈SP〉の三本の本文では、姫宮に連れられて大梵王の前に出た金色太子に、大梵王が宝の小箱を授け、さらに姫宮も太子に飛行の玉を与えたという意味になっているが、それだと、Aの後の「一さいしゆしやうのねかはん時は云々」の文への続きが悪い。〈新編〉と〈慶應甲〉では、Aの文の主語「ひめ宮は」が「ひめみやには」とある。これだと、大梵王が太子には小箱を、姫宮には飛行の玉を与えたとの意になり、後の文への続きは良くなる。しかし、この飛行の玉については、少し前の所に、姫宮が「みつからは、てんのひきやうと申物をもちたり」と太子に語ったという記事が、A類第一種第二種の諸本すべてに出ている。従って、ここでは、太子に飛行の玉を与えたのは、姫宮でないと矛盾することになる。このように前後の叙述から考えると、Aの一文は、やはり〈高野山〉や〈SP〉が原型であり、〈新編〉や〈慶應甲〉は、（例文5）の部分だけで文章の合理化をはかったものと思われる。そして〈反町〉がこの一文を欠くのも、不注意による脱落ではなく、これも後の文への続きを良くするために、意識的に省略したのであったかも知れない。

以上によって、A類第一種の五本は、左のごとく関係づけることができるであろう。



なお、第一種の(イ)(ロ)(ハ)の三種の間における本文の異同は物語の前半部に多く、金色太子が姫宮を尋ねて天空を遍歴する後半部では少くなっている。

A類第二種の〈慶應甲〉と〈末松〉は、大部分は語句の末に小異がある程度で、明らかに同系の本文である。主な相違個所を挙げれば、次の通りである。前が〈慶應甲〉、後が〈末松〉である。

（1）いつれも一天下には、をろかなる事もおはせし物なれとも、これをはためしすくなき事にそ申ける、まことにあめかしたに、なひかぬ草木もなし——何（いつ）れも一天まことに、靡かぬ草木もなし

(2)せめてひめ宮にてもおはしまさねは、これをのみ、あさ夕なけき給ふ――せめて姫宮にてもおはしまさばと、それをのみ、朝夕なげき玉ふ

(3)ひとへに、ちこくのしゆしやうを、仏のすくはせ給ふにことならす――ひとへに修羅地獄の仏、衆生を救はせ玉ふに異ならず

(4)われはしやはせかいにはあらす、大ほんわうくうの、こかねのつゝゐと申所に、はやむまれかはりて侍る也――我は黄金(こがね)の筒井と申す処に、早や生れ換(かは)りて侍るなり、娑婆世界にはあらず、大梵王宮の都なり

(5)女人、さやうの所ありとはきゝ侍れとも、くはしき事はきゝ侍らす、これよりにしにむかひ給ひて、三年みを(ママ)おはして、めてたき僧にあはせ給はんに、とひ給へ――女人きゝ玉ひ、左様の処ありとは聞およべども、委しきことは知り侍らず候、去りながら、これより西に向ひて、三年三月行かせ玉はゞ、目出度僧に逢はせ玉はんに、問ひ玉へ

(6)しらぬみちをたとり行事、露のいのちもおしからすとて、なみたをなかし給へは――知らぬ途をたどり行くこと、露の命もをしからねども、かやうにまよひ申事よとて、なみだをながし玉へば

(7)六年かはね(ママ)、いきとまるならひなり、はらすちきれて、いきとまるとて、よにくるしけに見えけれは――六年飼(かは)ね、息とまり、腹筋きれて、喉乾燥(のどかわ)くとて、世に苦しげなる息をつき、申ければ

(8)大ほんわうくうの、こかねのつゝ井と申所を、しらせ給ふかと、おほせられけれは、そう、いかなる人なれは、うろの身にて、これまてはきたり給ふそや――大梵王宮の黄金の筒井と申処を、有漏(うろ)の身にて、是れ迄は来り玉ふぞや

(9)人のため、よき事をはそねみて、ためあしき事をはよろこひ――人のため、よき事をばそねみねたみ、悪しき事をば喜び

(10)三日はかりおはしまして、御らんしけれは、うつくしきしらはま有、それを御らんすれは、いとすゝしき風ふきて、こ松おひならひたり――三日計りおはしまして、御覧ずれば、いと涼しき風吹き、小松生ひ並びたり

(11)太子これを御らんして、あはれ姫宮をたつねまとはぬ身なりせは、かやうのたつときところにあらまほしくて、御こゝろもとゝまりて、しはらくやすらはせたまへとも、さて有

へきにあらされは、こゝをもすこし給ふ、姫みやをたつねこすは、かゝる有かたき所を、いかてか見んとおほしつゝ、又そらへいそきのほり給ふ（中略）やゝ久くありて、こひかなしひ給ふ姫宮とおほしきか、こかねの花かこに、こかねの花を入て、みつからもたせ給ひておはしますをみ給へは、もとよりも有し御すかたにいやまして、うつくしき事、中〻ことはにはをよひかたく――太子是を御覧じて、あはれ姫宮に何時か逢せ玉はんと急ぎ玉ふ（中略）やゝ久しくありて、恋ひかなしみ玉ふ姫宮と思しきが、黄金の花籃に、黄金の花を入て、身づから持せ玉ひておはしますを見玉へば、素より尋ね惑はぬ身なりせば、斯様の貴き処にあらまほしくて、御心も留まりて、暫らく休らはせ玉へども、さてあるべきにあらざれば、此処をも過し玉ふ、姫君を尋ね来らずは、斯る有難き処を、如何でか見んと思しつゝ、又空へ急ぎのぼり玉ふ、さて姫宮は、有し御容貌に弥増て、美しきこと、中〻言葉には及び難く

以上のうち（1）（8）（10）の傍線部分は〈末松〉の脱文、または省略と考えられる。（2）（3）（4）（5）（7）は表現の違いであるが、この個所を第一種本と比較すると、すべて〈慶應甲〉の方が第一種本と合致する。また（6）は〈末松〉の方に〈慶應甲〉に無い傍線の一句が入っているが、これも第一種本に合致するのは〈慶應甲〉である。（11）は相違の最も大きい個所で、傍線の長い一文が、（中略）の個所（この部分は二本ほとんど同文である）をはさんで、前と後とに位置が変っている。しかし、ここは叙述の順序からいって〈慶應甲〉の形でなければならず、第一種本も〈慶應甲〉と同様である。おそらく〈末松〉の底本に錯簡があったのであろう。残る（9）は、第一種本の〈反町〉を見ると、「人のためよき事そねみねたみ、あしき事をよろこひ」とあって、ここだけは〈末松〉が第一種本と合致する。この個所の〈慶應甲〉の「そねみて、ためあしき事」という表現には、やや不自然な感じがある。おそらく第二種本も〈慶應甲〉の上位の本にあっては、〈末松〉のごとき文であったのではないか。

以上を総合すると、第二種の本文の正系を承けるのは〈慶應甲〉と見るべきである。〈末松〉はその本文にいくらかの改変を加えたほか、不注意による説脱を犯したものであろう。

第二種本の本文は、これまでに挙げてきた例からも窺えるように、第一種本と密接な関係を有している。部分的に見れば、

第一種の(ロ)〈高野山〉(ハ)〈SP〉よりも、(イ)〈反町〉に近い所もあるが、全体としては〈反町〉との間での細かい異同が挙げきれないほどに多い。主な個所を挙げて比較してみる。

(例6)

〈反町〉 されとも、ゆくすへせんしうはんせいを、たもたせ給ふへきとおほしめせとも、A おいの身は人をもきらはぬ事なれは、大わうもきさきも、よわいかたふきまします事こそあはれなれ

〈慶應甲〉 さるほとに、行すゑせんしうはんせいを、たもたせ給ふへきとはおほしめせとも、A おひする事はくらゐもをそれぬ物なれは、大わうもきさきも、よはひかたふき給ふそあはれなる

(例7)

〈反町〉 きさきは、さきのよは、日ほんみのゝ国の、二ひろくちなわにてありしか、ものゝいのちをころしつるか、B ほけきやうの御こゑを、みゝにふれしにより、かたしけなくも、きさきのくらいにむまれたまへども、こたねあたはす

〈慶應甲〉 又きさきのせんしやうは、日本みのゝ国の、二いろくちなはにて有しか、物のいのちをとりつれとも、B ほつけきやうどくじゆするを、あるたうにてみゝにふれしゆへ、きさきのくらゐにうまれ給へとも、C これもくわこにて物のいのちをとりしゆへに、こたねあたはす

(例8)

〈反町〉 さてなをふしきの事あり、大わうの御とし九十にてましますか、此ひめ君いてき給へは、廿はかりにわかくなり給ふ、きさきは六十にておはしますか、十七八にそみへ給ふ、D くはんはくとの北の御かたはめのとにて、五十はかりにならせ給ふか、それも十七八にそみへ給ふ、それならす、このひめみやおかみ申人、わかきはあいきやうつき、おいたるはわかくなる、E 人々申給ふやう、御かと、このひめみやいてきさせたまひてより、きさきもみなく、わかくならせ給ふ事、ありかたき御事と申もおろかなり、されは、たかきもいやしきも、F まいりておかみ申けり、よろこふ事かきりなし

〈慶應甲〉 かくてふしきの事侍り、大わうの御とし九十にてましますか、此姫君いてき給ひてより、廿はかりにわかやき給ふ、きさきも六十にておはせしか、十七八にそ見え給ひける、D 御めのとにまいり給ふくわんはく殿のきたのかたも、五十はかりにて侍しか、これも十七八にみえ給ふ、それならす、

此女宮おかみ申人、わかきはあひきやうつき、おひたるはわかくなりけれは、まことにありかたき事、申は中〳〵をろか也、されは、たかきもいやしきも、くんじゆして、おかみたてまつる事かきりなし

以上三例の、傍線を付した個所について見ると、Aは大王と后に関することであるから、〈慶應甲〉の方が適切なことばのように思われる。Bも〈慶應甲〉のごとく「あるたうにて」の語のある方が表現としてゆき届いており、また〈反町〉に欠けるCの句も、これのある方が、下の「こたねあたはす」への続きが良い。次の（例8）は全体に詞章に相違の多い所であるが、ここもDは〈慶應甲〉の表現の方が整っている。Eは〈反町〉にだけある文であるが、これは前文の繰り返しであって、ややくどい表現となっている。

（例9）

〈反町〉 ひめみやのたまふやう、我はこれ、くるこくの大わうのに（ママ）、てん大たまひめといふなり、われいかなる事にか、見る人としわかくなり、わき（ママ）人は、あいきやうつくにより、まやこくの大わうきこしめして、我をむかへとり、御としわかくなりたまはんとて、A御つかいあり、ちゝの大わうへたひくつかはされける、Bちゝ大わうも、はゝきさきも、たゝ一人ある子を、いかゝつかわさるへきとて、おしませ給ふ事かきりなし、さてまやこくの大わういかりをなして、Cそのきならは、くるこくをうちとるへし、Dまやこくは十八万きのところなり、くるこくは十一万きの所なり、Eいかてかたてやうへきとて、大わうもきさきもなけき給ふ、Fたまんきのせいにはせめらるゝとも、Gみつからをはつかはすましきと侍れとも、我おやのけふやうに、すゝみいてたり、されとも、心くるしきたひのそら、月のいるさの山もゆかしく、なかめつるなりと、こたへ給へは、そのとき、あまくたり給ふ御かた、おほせけるは、われはこれ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こんしき太子と申ものなり、Hくるこくの大わう、ひめみや御をしみのよし、うけ給をよひまいらせ候、われにちきりをなしたまはゝ、ひめみやをは、これよりくるこくへ返し、まやこくを、われ一人ゆきて、たいちしたてまつらんと、のたまへは

〈慶應甲〉 ひめ宮のたまふやう、我はこれ、くる国の大わうのこ、てんおほたまひめといふなり、されは、我をひとめ見る人は、おひたるはわかくなり、わかき人は、あひきやうつ

くにより、まやこくの大王きゝをよひ給ひて、我をむかへとり、としわかく成給はんとて、A御つかひありしかとも、B ちゝ大わうにも、きさきにも、ひとり子にて侍れは、おしみ給ふ事かきりなくて、うけひき給はされは、まやこくの大王げきりんありて、D くるこくはせうこく、わつか十万きの所なり、まやこくは十八万きの国なれは、C うちしたかへて、我をとらんときこえけれとも、G 我をはつかはすましきと、ちゝはゝのたまへとも、おやの命をいたはりて、すゝみて出侍れとも、心くるしきたひのそら、月のいるの山もゆかしく、なかめつるなりと、かたり給へは、その時、あまくたり人、おほせけるは、我はこれ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こんしき太子と申もの也、H されは、たゝいまの御物かたりのよしを、きゝをよひて、これまてまいりて候、われにちきりをなし給はゝ、これよりくるこくへ返したてまつりて、まやこくをは、我一人まいりて、たいちせむと、のたまへは

この一節では、とくにCDEFGの一連の文における異同が問題である。〈反町〉の文では、Cの主語はまや国の大王であり、Eの主語はくる国の大王と后であるが、その間のDは、CEのどちらに続くのか、文脈が不明瞭である。Cを承ければ、まや国の大王のことばとなり、Eへ続ければ、くる国の大王后のことばとなる。前後のどちらかに、接続を示す語を入れるべき文である。この所を第一種本の〈SP〉は

さてまやこくの大わう、いかりをなして、そのきならは、くるこくをうちとり、ひめをとらんとのせんしなりけり、ちゝ大わう、たとへまやこくの大せいにはせめらるゝとも、身つからをはつかはすましきと、の給へとも

というふうに、DEの部分がなく簡略化されながら、文意は通してある。しかし〈高野山〉は〈反町〉とほとんど同文であるから、〈反町〉のような形が第一種本の原型であったとして良いであろう。おそらく、この種の物語の詞章によく見られる例で、文章を綴ってゆく間に表現が屈折してしまったのであろう。これに対して〈慶應甲〉では、CDを入れ替えた形になっていて、ここではDはまや国の大王のことばとして、文脈が通っている。そしてEFがなく、Gへ直接に連なっているが、この部分などは、〈慶應甲〉から〈反町〉の錯雑した文への変化は考えにくく、〈反町〉を〈慶應甲〉が改めて文意を通したと解するのが妥当のように思われる。その他、ABHの個所も、〈反町〉に較べ〈慶應甲〉の方が、整理された文章になっていることが

みとめられる。

（例10）

〈反町〉 とまらぬ月日なれは、三とせもすきゆく、ひめみや十六にならせたまふ、あてになをいつくしくみへさせたまふ、A ひかりさしそうこゝちしてみへさせたまへは、B いとゝ太子の御ことおほしめしける

〈慶應甲〉 とまらぬ月日なれは、三とせも過ゆけは、ひめ君はや十六にならせ給ふ、あてに猶うつくしく、ひかりさしそふ心ちしてみえさせ給へは、B いとゝ太子の御事のみおほしめしける

（例11）

〈反町〉 さるほとにたいしは、まやこくにて、姫みやのかくれさせ給ふをは、ゆめにもしらせたまはて、はや三とせはたちぬ、せんせの御ちきりうすかりけん、C ひめみやの御ことのみにて、あかしくらし給ふ、千人のきさきも、御心にいれさせたまふは、一人もおはしまさす、D たゝひめみやの御ことのみにて、あかしたまふ

〈慶應甲〉 さるほとに太子は、まやこくにて、姫宮のかくれさせ給ふ事をは、夢にもしらすして、三とせもすきぬれは、C ひめ君御心のうちもいかならんと、おほしめしやり、千人のきさきも、さらに御心にいらす、D ひめみやの御事のみおほしいてゝ、あかしくらし給ふ

右の二例では、〈反町〉は、AとB、CとDという近接した個所に、同じ文句が使われ、表現の稚拙さを感じさせる。〈慶應甲〉では、Aはなく、CはDと異なった表現になっているが、これも〈慶應甲〉が〈反町〉のような文を改めたのではないであろうか。

（例12）

〈反町〉 これまては、いかなる人のをしへにておはしますそと、とわせたまはゝ、しやはにては、一さいしゆしやうをてらしたまふ、みやうしやうほし、まためいとにては、こくうさうほさつと申そうのをしへと、おほせ候へとのたまへは、A 太子、こまかに御をしへ候へは、はるかのみちにまよひしも、はるゝ心ちして、うれしくこそ候へ、かへすゝみちひきおはしませとて、むまにうちのりたまひける

〈慶應甲〉 これまては、いかなる人のをしへにてきたりたまひしそと、ゝはせ給はゝ、しやはにては、一さいしゆじやうをてらし給ふ、みやうしやうのほし、又めいとにては、こく

うざうほさつと申せし僧のをしへにて侍ると、仰候へとのたまへは、太子は、A御をしへのことく、かの道にまよひ給ひしも、すこしははるゝ心ちして、うれしくこそはへれ、返ゝみちひきかせ給へとて、馬にうちのり給ひける

右のAの個所は、〈慶應甲〉の文では意味が通らない。「かの道」は「はるかの道」の脱字としても、「御をしへのことく」では文意が続かず、ここは〈反町〉の「こまかに御をしへ候へは」のごとき句でなければならない。ところが、この個所は第一種本においても、次のように異同が見られる。

〈高野山〉 御をしへのことく、はるかの道にまよひしも、はるゝ心ちして、うれしくこそ候へ

〈SP〉 御そうのをしへにまかせ、はるかのみちにまよひしも、今そはれ行心ちして、うれしくこそはおほしめされける

文章として最も整っているのは〈SP〉であるが、〈高野山〉は〈慶應甲〉と同じく「御をしへのことく」とあって、同じ誤りを犯している。既に第一種本の関係を検討した条で述べた通り、〈高野山〉が直接交渉をもつのは〈反町〉である。また〈慶應甲〉も、第一種本の中では〈反町〉に全体として最も近い本文である。〈高野山〉と〈慶應甲〉との間に直接の承接関係がないとすれば、このAの文に関しては、〈反町〉の上位に位置する本の本文を、〈高野山〉と〈慶應甲〉が、それぞれ承けたものと考えるべきであろう。

（例13）

〈反町〉 またかい〳〵しからすとも、このほつしをたのみたまはゝ、われむかしくわんをたて、十あく五きやくのつみつくらんしゆしやうを、みちひかんと思ふなり、しやかにようい、三かいのしゆしやうのくにあわんを、一人もあくしよにおとすへからすと、うけ給しにより、此かた、Aちこくもすみ侍り、また六たう四しやうにおもむくみちのはしめ、この川のはしにてさたまり候なり、このゆへに、みつから川のはたをさらすして、一さいしゆしやうをすくうなる、Bつみふかきさい人は、こくそつもこひすかす、あまりにおもきさい人は、くにかはり候なり、ほのをにもへこかるゝ、又、C人になき事いひつけて、なけかせしものなり、とくしやにのまるゝものは、しやはにて、よくしんにちうして、人のものをすくしてとり、わか物をはおしみ、あるひは、おとこおんなにこゝろをかけ、まうしうふかくあるゆへに、身のうちよりほのをもへいてゝ、なけき候人なり

〈慶應甲〉そのうへかひくしからす共、此ほつしをたのみ給はゝ、我むかしくわんを立、十あく五きやくのつみふかきしゆしやうなりとも、すくはんとおもふ也、しやかによらい、三かいのしゆしやうをは、一人もあくしよにおとすへからすと、ちかひ給ふにより、A ちこくもいまはすみ侍りける、又六たう四しやうにおもむくはしめ、此かはのはしにてさたまる也、このゆへに、みつから此川のはたをさらすして、一さいしゆしやうをすくう也、B されは、つみふかきしゆしやうの身にかはりて、此ほのほにこかるゝ也、C 人になき事いひつけたるものは、此どくしやにのまるゝ也、よくしんにぢうし、我物をはほとこさす、人の物をわうりやうし、ほしがり、おとこをんなのれんぼふかきゆへ、身のうちよりかくほのほをいたし、なけく人なり

Aは〈反町〉〈慶應甲〉二本ともに意味を解しにくい。第一種本の〈新編〉は「地獄にすみ侍り」、〈SP〉も「ちこくにもすみ侍り」とする。おそらく、このように「地獄に住む」の意であろうと思うが、〈高野山〉では〈反町〉と同じく「ちこくもすみ侍り」となっている。ここでも〈反町〉〈高野山〉〈慶應甲〉の三本が共通の本に基づいていることを窺わせる。次にBは、〈慶應甲〉はよくわかるが、〈反町〉の文は意味が通じにくい。第一種本の他本を見ると

〈高野山〉つみふかきさい人は、こくそつもこひあかす、あまりにおもむきさい人のくにかはるなり、ほのほにもえこかるゝ

〈SP〉あまりにおもきさいにんは、われらのくにかはり候也、ほのほにもえこかるゝそかし

とある。〈SP〉は〈反町〉の文をやや簡略にして意味を通そうとしたごとくであり、〈高野山〉は〈反町〉とほとんど同文である。これを見ても、〈反町〉〈高野山〉のような文が元で、〈慶應甲〉はそれを改めたものと思われる。またCも、〈反町〉は文脈が続かない表現であるが、ここは〈高野山〉も〈SP〉も〈反町〉と同文である。〈慶應甲〉のみが、主語と述語の対応した文となっている。

（例14）

〈反町〉いつれもたゝ人にてはおはしまさす、かゝるたつときほさつとあらはれ給ふ、A 一さいしゆじやうのほとけとあらはれ給ひ、ほんふをすくはんためなり

〈慶應甲〉いつれもたゝ人にてはおはしまさす、かゝるたつ

ときほさつとあらはれ給ふ、ほんぶをすくはんために、衆生となり給ひて見せしめ給ふなり　A

ここのAの文も、〈慶應甲〉は、仏菩薩が衆生済度のために仮に人間と顕れたという本地垂迹の意味を正しく述べているが、〈反町〉の文では、「一切衆生の仏と顕れ給ひ」は、すぐ前の「かゝる貴き菩薩と顕れ給ふ」と同じ意味になり、表現が重複してくる。しかし、ここも〈高野山〉〈SP〉ともに〈反町〉と同文である。

以上見てきた所によって、第二種の〈慶應甲〉は、第一種の〈反町〉と叙述の運びは対応しており、〈反町〉よりも文章が整い、表現が正確になっていることが認められる。〈慶應甲〉の文がくずれて〈反町〉のようになったのか、〈反町〉のごとき文を改訂したのが〈慶應甲〉であるのか、俄に断定はし難いが、上記の例文における比較の結果としては、後者の可能性が大きいのではないか。そして、第一種の〈高野山〉や〈SP〉も〈反町〉の文を改めているが、それは〈慶應甲〉とは直接の関係なく行われている。結局〈反町〉の本文を中心に、他の諸本が、それぞれ独自の改訂を加えたとする結論になるが、〈高野山〉と〈SP〉は〈反町〉の改訂であることがほぼ確実と思われるのに対して、〈慶應甲〉の場合は〈反町〉との関係が二本より遠く、前後関係にもなお疑問を残す点がある。〈慶應甲〉だけを第二種本として区別した所以である。五五ページに図示したA類第一種の五本の関係に付け加えれば、第二種の〈慶應甲〉は、第一種五本の共通祖本よりさらに上位の本から岐れたものとなすべきであろうか。

B類の〈名古屋〉は、戦災を受けた由で、本文を明らかにすることができないが、「室町時代物語集第二」に解題が載っているので、その範囲で他の諸本と比較してみる。本書は大形の奈良絵本の本文だけを写した本である。挿絵の個所を半丁空白にしており、それから推測すると、親本は三冊本で、上巻・中巻に各七頁、下巻に六頁の挿絵の入った奈良絵本である。

〈名古屋〉の本文は、A類諸本と詞章の相違する所がかなり多く、和歌の数はA類と同じく三十二首であるが、その語句も異なり、中には全く別な歌もある上、歌のある位置も前後出入しているという。前記の解題に記載されている相違個所を見ると、まず、A類諸本に共通している脱文個所が〈名古屋〉には備わっている。（以下、A類本としては〈反町〉を以て代表さ

せ、他本の主な相違は傍記する。）

（例15）

〈反町〉　りうにうちのり、廿三（三十三）ねんにゆくみちを、十三年にゆきつきたまひけれは、しゆみせんのことくなる山あり

（脱文）

ひの山とて、ほのをもへこかるゝことひまなし、またそれを四十九日おはして、この山をみなみに御らんして、せうねつ大せうねつのしゆくを、にしへゆき給ふへし

〈名古屋〉　りうにのりて、ゆき給ふほとに、十三ねんにわたらせ給ひて、御らんすれは、しゆみせんのことくなる山あり三七日のみちを七日につき、御らんすれは、おしへのことくに、そうにあい給ふ、うれしくて、むまよりおり、かしこまつて申給ふやう、ひんなき申ことにて候へとも、大ほんわうくふの、こかねのつゝゐや、しらせ給ふかと、申させ給へは、いかなる人なれは、うろの身なから、これまておはしますそと、の給へは、太し、しやはにて一夜のちきりをむすひし、によ人をたつね候とて、なみたをなかし給へは、さやうの所はきゝて候へとも、くはしくはしり候はすとならす（おゝすカ）、きりのはやしを、六十四日おはしまして、又つるきの山より、おひさかりたるみちあり、此みちをとをるものは、きりさくかことし、しやはにて、ゆく（ママ）さかつせんにきりつかるゝ、もののかすならす、かなしき事かきりなし、此みちを三七日わたらせ給ひて、又

ひの山とて、ほのをのひまもなく、もへ候はんする所を、四十日おはして、此山をみなみに御らんして、しやうねんに、つねにねんしゆして、にしにむきてゆき給へ

右の文は、〈反町〉だけを読んでいると、脱文を見逃すかもしれないが、脱文部分の前の文は、太子自身の旅の経過を述べているのに、後の文は、僧が太子に道を教えている言葉であって、〈名古屋〉の一文がなければ、文脈が通じない。このような長い脱文が、A類本に共通して生じたのは、その祖本の段階で、一丁分位落ちたのかもしれない。これによって、〈名古屋〉は、現存A類諸本の上位の本に連なっていることが明らかであろう。

（例16）

〈反町〉　ひめみやも、太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

（脱文）

さて、ふくとく山におはしまして、御らんすれは

〈名古屋〉　太しも、ひめみやも、よろこひ給ふことかきりな

し

さて、のり給ひし、りうは、せんにしたうしと、あらわれて、つかへ申ける

さて、ふくとく山へおわしまして、御らんすれは

右は、物語の最後で、太子と姫宮が、福徳山において、毘沙門天・吉祥天女と顕れるという条である。この個所では、〈名古屋〉にある中間の一文は、〈反町〉のようにこれが無くても、文脈の上で不自然な所はない。必ずしもA類諸本の脱文とは言えないのであるが、C類の〈慶應乙〉にも、この個所に、

太子をこれまて、おくりたてまつるむまなれとて、こくらくの、りうのこまとて、ばとうくわんおんのけしんと、なりにけり

という、やはり龍馬に関する記事が出ている。それに、本地物においては、物語の中の人物だけでなく、主人公の苦難を助けた馬も神と現じたことを語る例が多い。ここも、A類諸本の共通の祖本が、〈名古屋〉のような龍馬に関する一文を、傍線の「さて」という語の重出に目移りして、書き落した可能性が大きい。

A類諸本の脱文を〈名古屋〉が備えている個所は、以上の二例であるが、そのほか、A類との大きな相違として、次の一節が挙げられている。

（例17）

〈反町〉 山のはに、かたふく月に、物とはん、わかれし人は、ありやなしやと

太子のこせをとふらはんとこそ、おほせられしにとて、ゆゝしき御とふらひとも、せさせたまふ

ひめみや、みつから御きやうあそはして、かくそなかめ給ふくらきよの、ひかりともなれ、あさ夕に、みのりの月の、くまもなけれは

と、すさみたまへり

かきりある、わかれなりとも、この世にて、いま一たひの、あふよしもかな

かやうに、あさゆふなかめたまふ、又かくなん

あさかほを、なにはかなしと、おもふらん、花よりさきに、われそちるへき

〈名古屋〉 山のはに、かたふく月に、ことはん、わかれし人は、ありやなしやと

夜もすから、御きやうあそはして、太しの御とふらい、さま

くにし給ておわしけれは、大わうも、きさきも、いかならんとて、さまくの御いのり、ひまなかりける

日かすのふるまゝに、みやはなけきたまふほとに、御まへなるにようたち(ママ)、よりあいて、太しをゑにうつして、御こゝろをなくさめまいらせんとすれ共、そのかいなし、ひめみや、かくなん

ゑにかきて、見るに心は、なくさまて、いとゝなみたの、
まさるつらさよ

と、おほせられけれは、めのと、かくなん

はかなくも、あたしうきよと、しりなから、きみなんつゆ(えカ)
を、おしむへきかは

みやは、われつれなくなからへて、太し一人、くらきやみにまよわせたてまつり候ことの、かなしさよとて、なけかせ給へは、めのと申けるは、御なけきはさることなれとも、それにつけても、御なからへ候て、のちのよをとふらわせ給へかし、しやうしむしやうのならい、六とうにりんへし給候わんときは、あいまはらせたまはん事、しりたまはす、たゞ一人おわしますことを見れは、大わうも、きさきも、御なけき、いよくつみふかくと、申せとも、きへいりさせ給はすして、

かくなむ

あさかほを、なにはかなしと、おもひけん、花よりさきに、
きゆるしら露

ここは、くる国の姫宮が、一夜の契りを交した金色太子の帰りを待ちこがれて、ついにはかなくなる条である。〈反町〉は、姫が太子をしのびつつ、四首の歌をよむことだけが記されているが、〈名古屋〉には、女房たちが太子の絵姿を描いて姫を慰めようとしたことが入っている。そして、歌の数は同じ四首であるが、中間の二首は、絵に関する姫の歌と、乳母の歌に変っている。そこで、この条が、C類の〈慶應乙〉と、D類の〈刊本〉とでは、どのようになっているかを見ると、〈慶應乙〉には、

せめての御事にや、太しの御すかたを、ゑにかゝせ給てそ、
御らんしける

という一文がある。また、

めのと申されけるは、まことに、さる御事にてはんへれとも、それにつけても、のちの世をこそ、とふらひまいらせ給へと、いろくなくさめ申給へと、かひなくて、たゝきへいる御心ちのみはんへる

と、〈名古屋〉に類似した乳母の言葉が出ている。〈慶應乙〉は、全篇を通じて和歌の一首もない特殊な本であるが、（例16）と同じように、この条も〈名古屋〉に通じる内容である。次に〈刊本〉のこの部分は、たいへん変っている。姫が太子の恋しさに空を眺めていると、東の空に観音・勢至が現れて音楽を奏し、西の空には童子が現れて舞い遊ぶ。また、玉手箱の中で人の泣く声が聞えるので、蓋をあけると、鏡に太子の姿が映る。これを見て、姫は太子が空しくなったと思い、嘆き悲しむというのである。ABC三類の諸本とは全く異なっているが、鏡に太子の姿が映るというのは、〈名古屋〉や〈慶應乙〉の絵姿のことと、一脈通じる所が感じられる。このように、A類本のような形と、B類・C類のような絵姿のことを述べる本とが、並び行われていたことが窺われるのである。この二つを較べると、この場面の描写としては、絵姿のことのある方が起伏があって、すぐれていると思われ、これをA類本のような平板な叙述に改めるのは、不自然なのではないであろうか。

横山氏の「物語集」の解題によって知ることのできる〈名古屋〉の本文の特徴は、以上の程度である。全体としては、C類やD類よりはA類に近く、A類本の上位にある本と関わっていることが知られるが、部分的にはC類との交渉が見られる。

C類の〈慶應乙〉は、前述のごとく、B類の〈名古屋〉と通じる個所があるが、〈名古屋〉との全篇にわたる比較ができないので、A類との関係によって考察を試みる。〈慶應乙〉の第一の特徴は、和歌が一首も無いことであるが、そのほかの本文は、A類と比較すると、大筋ではほぼ対応した叙述の運びである。しかし、叙述の内容は、詳しい所と簡略な所とがある。

（例18）

〈反町〉　むかし、てんちくに国あり、なをはくる国とそ申ける、そのくにゝ、わう一人おはします、御なをはせんさいわうとそ申ける、よろづめでたき事、人にすぐれておはします、ときにしたかひて、たからのふる事、あめのごとくなり、A いづれも一てんかに、おろかなることおはせとも、これをためしすくなき事にて申ける、あめしたに、なひかぬくさ木もなし、たから日にしたかひてふりくたり、しろかねこかねのついちに、こかねのとひらをたて、にはには、こんくるりをしき、こかねのゐさこをちりはめ、せんすいのこたちは、ひかりをましへたるこゝちして、おもしろき事申はかりなし、

大りには、わしのはたかのはにて、B ゑんしちつくにそふかれたり、こかねのかわらに、しろかねのゆかをならへ、にしきのきちやうをたてられたり

〈慶應乙〉 むかし、天竺にくにあり、なをはくるこくとぞ申ける、A 一天の御かどの、おろかにましますといへ共、ためしすくなくぞおはしける、あめがした、なひかぬくさきもなかりけり、たからはときにしたかひてふれり、されは、しろかねのつゐぢ、こかねのとひらをたて、みちには、こんくるりをのへてしき、しやくせんだんをならべて、こかねのいさごをしき、せんすいこだち、ひかりをまみ入たる心ちして、おもしろく、内裏をは、わしのはとたかのはをもつて、B ゑむをぞふかれたる、こかねのみかふしに、しろかねのとこをならべて、にしきの御てうをはたてたりける

冒頭の一節であるが、両本の本文には、同文に近い部分が断続して現れている。そして、傍線Aの〈慶應乙〉の文は意味が不明瞭であるが、〈反町〉を見ると、どんなに立派な王でも、どこかに欠ける所があるものだが、この王には言う所がなく、古今無類であった、の意と解することができる。これは〈慶應乙〉が〈反町〉のような文に拠りながら、言葉が足りなかったことに原因があったと思われる。傍線Bの「ゑんしちつくり」は、A類諸本が皆同じでありながら、意味の不明な語である。〈慶應乙〉が単に「ゑむ」(縁)とするのは、「ゑんしちつくり」が分らなかったためと思われ、「ゑん」が「ゑんしちつくり」に変化することは考えられない。

(例19)

〈反町〉 ひめみや、御とし十三にならせたまへは、ひかりさしそう心ちして、いつくしさかきりなし、御心はへもおとなしくて、かほうちあかめ、のたまふやう

わらはゆへにて候へは、なにをかおしませ給ふそ、まやこくは十八万きの大国なり、くるこくは小こくなれは、うちとられんは一ちやうなり、みつからゆへに、くにのみたれあらん事、あさましく候へは、まやこくへゆき、大わうの御心をやめ侍るへし

と申給へは、大わう、けにもとやおほしけん、その御いてたちをそ、いとなみ給ふほとに、ひめみや、かくなん

なからへぬ、ちきりそいまは、あたになる、心つくまて、

あふよしもかな

たらちをに、けふはわかるゝ、みちなりと、あすはゆきあ

ふ、はしとなりなん
きさき、かくなん
たまてはこ、ふたみのうらの、おきなか〔ら〕、なかのかけ
この、はなるへきかは
ひめみや
なにとてか、ふたりのおやを、すへなから、なかのかけこ
の、はなれはつへき
〈慶應乙〉 ひめみやも、やう〳〵御とし十三にならせ給ふ、ひかりまさりて、あさひのいで給ふかとのみ、うたがはる、御よそほひ、くまなくおはしける、ちゝの御かど、かやうにのたまひしを、ひめみやきゝ給ひて、御かほうちあかめて、申させ給ひけるは
みつからまかり候はすは、さためてせめられ給ふへし、さ
候はゝ、わらはかためには、ふかうにて候べし、そのうへ、
くわこげんざいみらいの、しゆくごうにて候へは、にんげ
んのいんぐわ、これにはしめぬことにて、さればこそ、か
しこき人はみな、しやうじをはなれんとさせ給候、みつか
ら、おやとなりことなりまいらせ候も、あさからぬ事と申
せども、われゆへに、かやうに物をおもはせ給ふ事、ぜん
ぜのしゆくしうとなるへし、われをさりかたくおほしめし
候とも、かいなき事なり、まやこくは大こくなれば、いか
でかたてあわせ給ふべき、せめられさせ給はん事、うたか
ひなし、されはそのとき、みつからみまいらせ候はん心は、
中〳〵まやこくへまいりたらんより、なげきなるへし、さ
れは、かう〳〵にもなりはんへらん、みづからまかりなん、
女ぼうたち、はした物までも、すがたありさま、じんじや
うにとゝのへて、四十人ばかり、したてゝ給り候へ
との給ひけれは、きさき、御なみたをなかして、おふせられ
けるは
せめられん事はじぢやうなれとも、もろともにこそ、いか
にもならめ、ゆめ〳〵あるへからす
とおふせらるれは、ひめみや、かさねて申させ給ひけるは
いかて、ことはりなき事をばおふせ候そや、みづから、い
またようせうのみにて、はなれ参らせんことは、ためしな
くはんへれとも、しやうじむじやうのならひ、あしたにゑ
いぐわをひらき候人も、ゆふへにはべつりのくもにかくれ
ぬ、されは人のいのち、くさばのつゆ、いなづまのひかり、
かぜのまへのともしび、おくれさきだつならひにて、はな

れはなれかたく思しめすとも、むじやうのかぜふかは、ゆめならては、いかてか御らんすへき、これは、このみをかへすく、十せんまんおうのあるじにておはしますは、日々に御ふみおも給りて、わかみも見まいらせ候ばやと、たかひに心はかよひなん、またよにあらば、見まいらせ候はんすることもありぬへし、たゝしやうじのわかれとおほしめして、いだし給へ

と申させ給へは、人々もみな、なみだをなかしける、みかども、けにもとおぼしめし、ともかくもおふせにこそ、したかひまいらせ候はんずれとて、御いてたちありけり

右は、隣国のまや国より、姫宮を差し出せとの難題を受けて、くる国の大王が嘆く条である。〈慶應乙〉には〈反町〉の姫宮や母后の歌は無いが、一字下げにした姫宮の言葉の部分が著しく長くなっている。比較すると、〈反町〉のように、姫の申し出を受けて、父王が姫を送ることを簡単に承知するよりは、〈慶應乙〉のように、姫宮が言葉を尽して父母を説得する方が、この場面には適切な叙述である。ここも、〈慶應乙〉のごとき叙述が〈反町〉のように変化することは考えにくい。〈慶應乙〉独自の増補と見るべきであろう。

（例20）

〈反町〉（第一段）

さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むらくも一むらひきおほひけり、ひめみや御らんして、あはれまやこくよりうかする（よする）せいやらんとおほしめして、かくそのたまふ

あまつそら、くものかよひち、ふみわけて、月ならすして、たれかゆくらん

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍るくものやうかなと、のたまへは、むらくものうちより人おりくたり、かくなん

七夕の、くもいのそらに、すむ水の、きみゆへいまは、おちまさるかな

とて、おちくる人をみたまへは、とし十七八はかりなる人なり、御なをしのいつくしきに、くれなゐのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさねゆゝしく、ひんつらふきなかしたまひたるやう、たゝ人ともおほへす見へさせたまひけるか、のたまひしは、君はいかなる人にてましませは、御こゑそらのくもまて、めてたくきこへさせたまへは、おもひのほかにあまくたるなりと、おほせありけれは

（第二段）
ひめみや、のたまふやう、我はこれ、くるこくの大わうのに、（ママ）
てん大たまひめといふなり、われいかなる事にか、見る人と
しわかくなり、わかき人はあいきやうつくにより、まやこく
の大わうきこしめして、我をむかへとり、御としわかくなり
たまはんとて、御つかいあり、ちゝの大わうへ、たひ〳〵つ
かはされける、ちゝ大わうも、はゝきさきも、たゝ一人ある
子を、いかゝつかわさるへきとて、おしませ給ふ事かきりな
し、さて、まやこくの大わう、いかりをなして、そのきなら
は、くるこくをうちとるへし、C まやこくは十八万きのところ
なり、くるこくは十一万きの所なり、いかてかたてやうへき
とて、大わうもきさきもなけき給ふ、十八まんきのせいには
せめらるゝとも、みつからをはつかはすましきと侍れとも、
我おやのけふやうにすゝみいてたり、されとも、心くるしき
たひのそら、月のいるさの山もゆかしく、なかめつるなりと、
こたへ給へは
（第三段）
そのとき、あまくたり給ふ御かた、おほせけるは、われはこ
れ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こんしき太子と申もの
なり
（第四段）
くるこくの大わう、ひめみや御をしみのよし、うけ給をよひ
まいらせ候、われにちきりをなしたまはゝ、ひめみやをは、
これよりくるこくへ返し、まやこくを、われ一人ゆきて、た
いちしたてまつらんと、のたまへは、ひめみや、御おやの御
なこりをしみたまひしことをかなしみ、ふるさとへかへりた
らは、さこそ大わうもきさきも、よろこひ給ふへしと、おほ
しめし、太子に御ちきりをむすひたまふ
（第五段）
さて太子は、まやこくのわうたいちし、くるこくのいくさを
やめん事、一ちやうなり、それをいかにと申に、われ、つる
きをもちたり、一すんぬけは、一千人かくひおちけり、二寸
ぬき給へは、二千人かくひをつる、つるきありと、おほせら
るゝ
（第六段）
さるほとに、ひめみやは太子と御ちきりあり、いつしか御な
こりおしみ給ふ、太子まやこくへそおもむき給ふ
（太子ト姫宮トノ贈答ノ歌四首アリ）
〈慶應乙〉（第一段）まやこくのかたより、むらさきのくも一むらひき
おゝひて、いそがしげにゆき候を御らんして、あわれまやこ
くより、まちかねおはしまして、いかなる人の、いつかたへ
おはしけるぞと、の給へは、むらさきのくもさかるやうにし
て、おちくたりしに人あり、これを御らんずるに、廿にたら

ぬほとのおとこあり、なをしのいろうつくしき、くれなゐのしたがさね、うすむらさきのさしぬきに、ゆゝしきさまにて、いかなる人なれは、そらのくもをとばせ給ぞや、御こゑくものうへまてすみのぼり、A かれうびんかとおもへば、御ことのねのひゝきは、ごくらくにてこたふくわんといふことをくわんすんも、かくやとおほへて、めてたくはんへれは、おもひのほかにあまくたりはんへると、申給へは

（第二段）

みやは、つゝましなからありし事とも、こまやかにかたり給へは

（第三段）

ふしぎなることにおほしめして、みつからは、これよりにし、ゆいまんこくのわうのひとりご、こんじきのたいしと申ものなり、B こんしきと申は、みよりひかりをはなし候ゆへに、かやうに申はんへるなり、しやうねん十九にて候と、おふせける、まことにめてたき御さまにておはしける

（第四段）

ちゝのみかと百廿、はゝきさき百さいとなり給ふか、ひめみやの御こととうけ給はりて、いかゝしても見まいらせて、すこしわかくならはやと、なげき給ふあいた、みやのおふせのことく、かうくともおもひて、むかへにまいりはんへるなり、たとひ、まやこくにおはしますとも、むかへたてまつらん事は、いとやすきことなり、これぜんぜのちぎりにやとて、御てをとりかはして、むかしいまの御ものかたりありて、あさからぬ御ちぎりなり

（第五段）

千よを一よとおほしけれ共、やうくとりのねもおとつれけれは、みやはくるこくへいそかせ給へ、みつからはまやこくへまかりむかひて、いくさをとゝめんと、申させ給へは、みやのおふせには、C まやこくは十まんくうのところなり、くるこくは十まんごくのところなり、されは、いかてかたてあはせたまふへきとてこそ、わがみもいでたちはんへれ、いはんやたいしは、たゝまんきのせいにては、かたときもこらへさせ給へからず、されは、いかでかたいしをむなしくなしたてまつるへき、われこそ、いかなるうきめにもあひはんへらめ、たかひにわすれぬ御事ならは、こんじやうこそはかなくとも、らいせにてはかならずあひまいらせ候へし、けふのわかれこそ、つゐのわかれとおもひはんへれと、なみたをなかし、の給ひけれは、たいしのおほせには、まことにおふせはさることにて候へとも、たゝわか申さんまゝにおはしませ、これよりすくに、ゆいまんこくへむかへたてまつらんすれとも、わらは、まやこくへまかり候はんするほとに、おもひなからに

て候、さてみやは、なに事もこのよならぬ事にて、又くるこくはせうこくにて候へとも、ゆゝしきくになり、まやこくよりまかりむかひ候とも、みやをはとりたてまつるへきにも候はぬなり、よのつねにて候はゞ、まやこくへは、十まんきのせいをもくそくしてこそ、むかふへけれ共、わかみは、きんせきといふよろい、こんかうといつしいしのうはおひ、まんきやうせんといふこてむねあて、さらにやのたつ事なし、また、きんかくゑんといふかたな、しんたましゆほうといふつゑあり、たんかねのいわやにはたつとも、このよろひにやたつ事あるへからす、また此つゑは、大はんしやくなり共、すこしもあては、くつれなん、おにまる、かなふつしといふのみゆみ、一やに千人かくひをいとり、二やに二千人かくひをいとるなり、ひたりみきりのわきに、大とうれん、小とうれんといふ、二のつるきあり、一すんぬけは一千人かくひをきり、そのうへ、ひとへのとくあり、まれにもきすをうくれは、さらにくるしからす、たゝ十まんきのいくさにかたんこと、かみすちきらんするは、なをさおひもありぬへし、ゆめ〳〵くるしからす候、申さんまゝにつかせ給へと、の給へは

（第六段）

さては嬉しき事にとて、すくにかへらんとし給ふ、此事を御ともの人々見まいらせて、ためしなきやうにそ、申あひけり、すてによもあけなん御ありさま、むすほふれたるけしきして、はなれかたく思しめしなから、さてあるへきならねは、いてたち給ふ

まや国へ出立した姫宮の前に、ゆいまん国の金色太子が現れる条である。両本の本文を便宜上五つに区切って対応させた。第一段は、〈慶應乙〉に和歌が無いほかは、ほぼ同じ内容の叙述であるが、傍線Aのような〈反町〉に無い語句が見える。第二段は、〈反町〉では姫宮が、ここまでの物語を要約して経過を語っているのを、〈慶應乙〉は「ありし事とも、こまやかにかたり給へは」だけで済まし、著しく簡略である。第三段は、傍線Bの金色太子の名の意味を説明する言葉が〈慶應乙〉には加わっている。第四段は、はじめに金色太子が姫宮の前に現れた理由を語っているが、その内容が全く違っている。〈反町〉では、くる国の苦衷を察して助けに来たとあるのが、〈慶應乙〉では、太子の父母の望みを叶えるためとしている。前者では、その代償として姫宮に契りを求めるのであるが、後者では、迎えに来たと言いながら、その場でやはり契りを結び、次の第五段で姫をくる国へ帰しているのであって、経過に矛盾が感じられ

る。〈反町〉のごとき形を改変したためではないかと思われる。第五段は〈慶應乙〉が著しく長くなっている。前半に、姫宮がまや国を退治に行こうとする太子を止める言葉があるが、そこに〈反町〉では第二段の姫の言葉の中にあった傍線Bの句が出ている。第二段を省略して、ここに移したのではないかとも考えられる。その後の、太子が一人でまや国を退治できるわけを述べる所では、〈反町〉は霊剣を挙げるだけであるのに対して、〈慶應乙〉は、そのほかに、鎧、石の上帯、籠手胸当、刀、杖などを加えて、不思議な力を強調している。増補したものと見るべきであろう。以上のように、この一節に関して見ると、〈慶應乙〉はA類系本文の省略できる所は省略して、独自に増補を加えたごとき観を呈している。

（例21）

〈反町〉 ひめみや、おほしけるやうは、太子は、三とせまちて、それすきなは、このよになきとおほしめせと、うけたまはり候つるに、はや三とせあまれとも、みへたまひ候はす、いかなる太子なれは、たゝかりそめのちきりゆへ、はかなくならせ給らん、みつから、あたなるいのちのきへやらて、物のみおもふことかなしけれとて、袖をしほらせ給ふこそいたはしけれ、せめての事にや、花そのにたちいて給ひて、花のちるを御らんして、わか身のうへとおほしめして、かくそなかめたまふ

あさましや、A よをうき風に、さそはれて、花よりさきに、われそちるへき

かやうになかめたまひて、いかにならせ給ふへき御身そと、なけかれけり

〈慶應乙〉 太子は、みとせまて、それすきは、此よになしとおほしめせとこそ、おふせられ候ひしか、いかなれは太しは、一夜はかりのちきりと、いのちをかへさせ給ふそや、われは、つれなくてなからへはんへるへきかと、御なけきかきりなし、なくさめにたちいてゝ、はなのこすへを御らんするに、A かせにさそはるゝも、わか身におほしめしられけり、御めのとも、いかゝならせ給ふへき御みそやと、いみしくなけきあへり

姫宮が太子の帰りを待ち佗びる条である。ここも〈慶應乙〉に和歌の無いことのほかは、同じ内容を文章を変えて述べている趣である。そして〈慶應乙〉の傍線Aの部分は、〈反町〉の和歌を念頭に置くと、花が風に誘われて散るのを見るにつけて、

自分の命も永らえそうにない、の意と解することができる。〈慶應乙〉の本文の元に、A類系のような文があったとするのが妥当と思われる。

（例22）

〈慶應乙〉御むまにうちのりて、にしにこゝろをかけ、おはします、よるひるをかきりなく、卅三ねんのみちを十三ねんにつかせ給ひて、御らんすれは、（ママ）をしへのまゝ、そらにのほりて、山中を三七日おはしまして御らんすれは、九十はかりのらうそう、きゝつることく、すこしもちかわすゆきあわせ給ふ、嬉しくおほしめして、むまよりおりさせ給ひて、しかくのところを、ねかはくは、こまかにおしへさせ給ふへし、かゝるうき世になからへて、かなしきたひにまよひありき侍り候、御じひなるへしと申給へは、此そう、こはいかなる人にてわたらせ給ふそや、このみちは、うろの身なからにてわたらせ侍るそ、また、さやうのところもありと、きかせ給へるは、いかなる人の申を御きゝ候そ、なにとしてしらせ給ふそと、の給へは、ありのまゝ申されけれは、あはれなる事哉、おはしまさん事こそかたけれ、すきにしみちはかずにも侍らす、これよりにしにむかいて、七月おはしまして、やみのよを卅三日すぎて、たけのはやしを三日すきて、きりのはやし六十四日おはしてのち、つるきの山とてあり、つるき、ちよりおひあかり、てんよりしたにおひたり、これをとをるには、身をもきりせむる事、しやばにていくさをして、きりつかれんを、あらゆるまんあわせたるくるしみなるへし、さても太子は、おはしますところも、めてたきところなり、また、しんある人なれは、こひはほたひのはしめなれは、さのみは、よもくるしみをはしまさし、このみちを三日おわしまして、ひの山とて、おひたゝしきひ、もへ候はんするおは、せうねつ、大せうねつ、くなうと、つねにくわんしてこへ給へ

ここは六五頁の（例15）に挙げた、A類本に共通する脱文の個所である。これを（例15）の〈名古屋〉の文と比較すると、文章にはかなりの違いがあり、〈慶應乙〉独自の部分も見られるが、叙述の運びは両本の間でほぼ対応して進められている。従って〈慶應乙〉は〈名古屋〉と共に、A類系の、脱文を生じる以前の本と関係をもつと考えて良いであろう。

（例23）

〈反町〉（一）さてもひめみやは、大ほんわうにまいり申給ふやう、しやはにてちきりし、ゆいまんこくのこんしき太子、これま

てたつねきたり給ひ候、ありしこと(事とも)も、こまやかにかたり申させたまへは

(二)大ほう(ママ)わうも、くはしくきこしめして、あはれとおほしめし、むかしより、こひする人おほしといへとも、うろのみなから、これまてたつねてきたれる事、さらになし、これまてたつねきたれる人を、かへすへきにもあらす

(三)こかねのつゝいの水にてみをすゝき、あまのはころもをきせて、くしてまいれと、の給へは

(四)ひめみや大きによろこひ、此よし申させ給へは、たいし、うれしくありかたくおほしめして、こかねのつゝ井の水をあひ、あまのは衣をめし給ひて、御らんすれは(まいり給へは)

(五)大ほんわうは、まことにさうかうけたかくおはしまし、たまのかふりあさやかにして、こかねのゆかのうへに、こさをしきてさし給へり、太子は、ゆかより下のさにおはしませは、ゆかのうへゝひきあけ給ひ

(六)太子をつくくと御らんして、しひの御まなこより、御なみたをなかし給ひて

(七)いかなる人にていらせ給ふそと、とはせ給へは、われはゆいまんこくのものなり、姫みやゆへに、これまてたつねまいりたりと、申させ給へは、大ほんわう、のたまふやう、ひめみやは、もとよりこの国の人なり、かりに人けんにむまれたり、によいほうしゆとは、この女人の事なり、太子にふかきちきりありて、かたしけなくも、このもとにむまれなから、またあふ事をゑたり、女人のみをあらためて、ほさつのくらいにのほるへき人なれとも、太子にこゝろさしふかきゆへに、いまた天女のくらいにておはします

(八)太子は、いまたうろの御身なれは、これはおはしまし(に)候へきにあらす、これよりひんかしに、ふくとく山といふやまあり、なに事もこれにおとらす、たのしみさかへたる所なり、その山へおはしまして、ひしやもんてんわうとあらはれ給ひて、一さいしゆしやうをみちひき給へ、ひめみやは、きちしやう天女とあらはれたまひて、ひしやもんのかたはらにおはしま(ま)せ、たへぬちきりをむすひたまへ、ひしやもんてんわうとあらはれて、よろつの人のふくをねかはんときは、此はこのふたをあけ給ふへしとて、三つあるはこのなかに、すこしちいさきをとりいたし、太子にたてまつり給ふ、一さいしゆしやうのねかはん時は、これをまきたまへと、おほせけれは、ひめみやも太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

(十)さて、ふくとく山におはしまして御らんすれは、しろかねこかねをちりはめて、こたちいつくしく、くうてんろうかくちう〳〵にして、十はうしやうともかくやとおほへて、めてたかりける

(十一)さて、此やまのぬしになりたまひて、ひしやもんてんわうとあらわれ給ふ、姫宮は、きちしやうてん女とあらはれ給ひ、一さいしゆしやうのねかひをみてたまへり、四わふてんのうしとらのはうに、ひしやもんてんわうとは、此御事なり

(十二)さても、たいしのちゝ大わうは、三百五十さいをたもち給ひて、ふけんほさつとあらはれ給ふ

(十三)くるこくの大わうは、五百さいをたもちて、あくまかうふくとあらわれたまふ、はゝきさきは、やうりうくはんおんとあらはれ給ふ

(十四)まやこくの大わうは、三百さいをたもちて、せいしほさつとあらはれ給ふ

(十五)太子の、まやこくにての千人のきさきは、みなほしのことくにあらはれ給ふ

(十六)いつれもたゝ人にてはおはしまさす、かゝるたつときほさつとあらはれ給ふ、一さいしゆじやうのほとけとあらはれ給ひ、ほんふをすくはんためなり、ありかたきとも申もおろかなり

〈慶應乙〉(一)此よし申されけれは

(三)さらは、かの人を、こかねのつゝゐのみつをあびせて、あまのはころもをきせまいらせて、これへくし給へと、おほせありけれは

(四)たまひめよろこひて、いそきかへらせ給て、太子の御ころもをぬかせまいらせ候て、こかねのつゝいのみつをあびせ申て、あまのはころもめさせて、くしてまいり給ふ

(六)大ほんわう、もろ〳〵あわれなる事にこそ侍れ、これまてたつねきたり給ふ人をは、いかてかむなしくかへし申へきとて、御なみたをなかさせ給ひて、おふせらるゝやう

(八)太子、いまたぼんぶにて侍れは、これにおはしますまし き人なり、これよりうしとらに、ふくとくさんとて山てらありけれは、おはして、一さいしゆじやうの、ねかひをみて給へとて、こかねのはこ三ある中に、ちいさきはこをとり出し給ひて、よものしゆしやうの、ふくとくねかはんに、あたへ給へとて、ひしやもんてんわうとなりておはしませ、たまひめは、あさゆふ御身をはなれすして、きちしやうてん女といはれ給て、こひをせんものに、ねかひをみて給ふへし

(九)太子をこれまておくりたてまつる、むまなれとて、こくらくのりうのこまとて、ばとうくわんおんのけしんとなりにけり

(十)さても、人けんにちきりふかくましまさん、のちのよまても、たつねおはしまして、浅からぬ御心さしせつなるによりて、ふくとくざんを給りておはします、御らんすれは、うつくしき山でらなり、いとめてたきところなり

(十一)太子は、しゆしやうのねがひによりて、ふくとくをあたへ給へり、みやは、きちじやうてん女とておはします

(十二)太子のちゝ大わうは、千じゆくわんおんとあらはしにて候、きさきは、せひしほさつとあらわれましまし

(十四)まやこくの大わうは、(ママ)しるへきゑんにより、大しやうふどうみやうわうとあらはれ給ひぬ

(十六)されは、こひせん人は、だうしんふかくして、ほとけをねんし、哥をよめは、かならすほとけをやすくして、わうしやうのもとひとなるへし

この条は物語の終りの部分である。本文の長さが、〈慶應乙〉は〈反町〉の半分程度に短い。叙述内容を対照しながら区切りをつけると、右のように、第二・五・七・十三・十五段が〈慶應乙〉には欠け、第一段は、〈反町〉の叙述内容を〈慶應乙〉は「此よし」の一語で済ませている。両者を見くらべると、物語の叙述としては、〈反町〉の方が整っているように感じられる。たとえば〈慶應乙〉の第十段の傍線Aの部分は文意が明瞭でないが、〈反町〉には対応する文がない。これは〈反町〉の第七段を省略し、それに代えて、この一文を挿入したのではないかと思われる。また、第十一段以降は、物語中の人物の垂迹を述べる本地物としての結びの部分であるが、そこが〈慶應乙〉で簡略になっているのは、やはり新な省略と考えるべきであろう。ただ〈慶應乙〉の方にだけ見える、第九段の龍馬に関する記事は、前述のごとくB類の〈名古屋〉には出ている（六五頁例16参照）。〈反町〉以下のA類本の脱文と考えられる個所であるが、A類本と直接的な関係の見られるのは〈名古屋〉であって、〈慶應乙〉は〈名古屋〉とは関係があるが、A類とは直接に関わっていないことがわかる。

以上によって、C類の〈慶應乙〉は、A類とは非常に大きな相違が見られるが、A類より古い形態と言える本文ではないとして良いであろう。そして、A類諸本に共通の脱文個所に相当する部分を有することと、B類の〈名古屋〉と通じる記事を有することからすると、〈慶應乙〉はB類系の本文に拠りながら、

和歌を全部省略すると共に、叙述に大きな改変を加えて本文を作った本であろうと判定される。

最後のD類〈刊本〉は、諸本の中で最も変った所の多い特異な伝本である。本書の本文は、全篇にわたって七五調を基調とした文章によって綴られていて、語り物の調子を帯びている。このことについて、横山重氏は「室町時代物語集第二」の本書の解題の中で、

「御みはぼんぶのみとし。てにかなひがたく候なり」とある、てといふ変体仮名は、天とも読み得るのであるが、自分等は今「みとしてに」と続けて読んでおいた。かういふ語法は、古い説経節などの語り物には、をり〳〵見える語法のやうである。それに、字として見ても、前後にあるての字や、又、天の字と比較して見ると、やはり仮名のての字に近いやうに見える。

と述べられ、さらに、「古浄瑠正本集第二」の、伊勢嶋宮内の正本「ふきあけひてひら入」の解題でも、この正本に見える「ひて平聞て、まつ〳〵きみへまいりてに、給はれかしと申ける」のてにについて、

かういふ語法は、太夫の個人的な癖では、勿論ない。国のなまりか、又は集団のなまりか、とにかく、古い語法らしい。かういふ語法は、古浄瑠璃にもあるが、説経節に多くあった。どちらも、古い正本に限るやうだ。そこで、今にして思ふのであるが、室町時代物語集第二冊の三十番に掲出した「毘沙門天王之本地」も、説経又は、古浄瑠璃の本文から取ってゐるのではあるまいか。

と言われた。

また、信多純一氏も、右の横山氏の説を承けて、「説経正本集第三」の天満八太夫正本「毘沙門之本地」の解題において、本書（承応板の草子）が、説経の正本の四段目までとほぼ一致すること、地の文章だけで展開して行くのでなく、適当に人物の科白の利用があること、六段の段分けのあった痕跡が見えること等によって、古い語り物の系統を引くものであることは、疑いがないとされた。そして、その古い語り物が、説経か、古浄瑠璃かという問題についても、本書の冒頭に「ひしやもんでんわうのゆらひを、くわしくたづぬるに」とあるのは、古説経特有の冒頭句と同じであることを以て、説経であろうと推定されている。

このように、既述のＡＢＣ三類の諸本を草子系とすれば、Ｄ類の〈刊本〉は、語り物系と言うべき性格を備えていることが明らかにされているが、この〈刊本〉は、文章だけでなく、物語の大筋は変らないものの、部分部分の叙述に非常に大きな相違が見られる。次に、主な個所を挙げてみる。

（1）くる国の大王が申子をする条　ＡＣ二類は、梵天王に詣でて祈願をするが、〈刊本〉は、大梵天王宮を内侍所に勧請したとある。また、梵天王の示現に、ＡＣは、大王と后の前生が語られるのに対し、〈刊本〉は、大王の前生だけである。

（2）くる国の姫宮が、国を救うために、まや国へ赴く条　Ａ類は、別れに際して、姫宮の歌三首と、母后の歌一首を載せる。〈刊本〉は、母后の歌一首だけである。その一首は類似している。また、出立して七日目に宿をとった場所を、〈刊本〉は「こけのぶ」とする。これは、Ａ類の「しのふ」と異なり、Ｃ類と同じである。しかし、この所で姫宮が月を詠めて歌をよむことは、Ａ類と一致する。

（3）姫宮の前に、金色太子が雲に乗って天下る条　Ａ類の、姫宮と太子がよむ歌二首は〈刊本〉にない。太子が姫宮の前に現れた理由を、〈刊本〉は、

ちゝのみかとは百さいになり給ふ、はゝのきさきは八十さいになり給ふか、御みの御事、かせのたよりにきこしめし、むかへてまいれと、のたまふゆへ、これまてまひりて候なり、いそき、ゆいまんこくへ御こし候へ

と語る。これはＡ類とは異なり、Ｃ類と一致する（七一頁、例20参照）。なお、この条の〈刊本〉の叙述は、ＡＣよりも著しく短い。

（4）姫宮はくる国へ、太子はまや国へと、別れを告げる条　Ａ類には六首の歌があるが、〈刊本〉は二首で、それも別の歌になっている。この条で、Ａ類とＣ類の間での大きな違いは、（例20）の第五段にある、太子の持つ不思議な武器であるが、〈刊本〉は次のようになっていて、Ｃ類に近い。

それかしかいへにつたはるたからには、きんせきおどしのよろひに、こんがうのかぶとをき。まんきやうせんのすねあてし。かたきにむかふものならは、やのたつことはさらになし、しゆほうと申せしつゑをもち、大きなる山なりとも、ひとうちうては、かたきのかたへくすれける、まづ、かなふしといふゆみは、ひとたびはなせは、千人やさきにかゝる也、たいとうれんせんすまるといふたちは、ひとふりふれは、せん人

のそのくひか、一とにはらりとおつるなり

右のように、大とうれん・小とうれん、という剣だけを挙げるA類とは違って、C類と似通っている。

(5)太子がまや国を制圧する条　A類やC類は、太子とまや国の大王との問答の中で、太子は、小が大にまさる例を、大王は、大が小にまさる例を挙げるが、〈刊本〉には、そのような記事がない。また、太子がまや国の軍勢を相手に戦う場面の語り口も、〈刊本〉は、AC類とは異なって、古浄瑠璃風の詞章になっている。次に、まや国の大王が降参して後、AC類では、太子はまや国に引き留められ、千人の妃にかしずかれて三年を過すとあるが、〈刊本〉では、太子は父母の待つゆいまん国へ帰ったとある。これは、くる国の姫宮と、三年後の再会を固く誓って別れた太子が、まや国で漫然と日を過したというAC類の語り方が不合理なので、これを改変したのではなかろうか。その所の〈刊本〉の文は、左のようになっている。

太子をぼしめすやうは、ゆいまんこくへかへらんか、くるこくへゆきつゝ、まづひめにあはんかとて、二のあしふんてみえけるか、百さいにおよひたる、ちゝはゝもちたることなれば、たゞひとりのみづからを、さぞやまたせ給ふらん、まつくこきやうへかへらんと、こんでんこまにうちのりて、ゆいまんこくにぞかへられける

(6)姫宮が太子の帰りを待ち侘び、ついにはかなくなる条

ここは、六六頁の(例17)に挙げたように、A類とBC類との間で、叙述に顕著な相違のある個所である。A類は、姫宮が太子の身を案じつつ、和歌(四首)をよんで嘆き暮したとするだけであるが、BC類では、太子の絵姿を見て心を慰めたという記事がある。そして、B類には、やはり姫宮の和歌が四首出ているが、A類と共通するのは二首だけである。〈刊本〉は、A類とも、BC類とも違い、次のような特徴のある叙述になっている。

姫君が空を眺めていると、東の空に観音・勢至が現れて音楽を奏し、西の空に童子の姿が現れて舞い遊ぶ。姫君が玉の手箱に寄りかかって、これを見ていると、手箱の中で人の泣く声が聞える。不思議に思い、開いてみると、中の鏡に太子の姿が映っていた。父母や女房たちも、これを見て驚く。姫は、これは太子がまや国で討死して、浄土へ往った知らせと、いよいよ嘆きを深くした。

このように、独自の趣向を構えているが、鏡の中に太子の姿を

見るというのは、BC類の絵姿と一脈通じる所が感じられる。また、〈刊本〉には、姫宮のよんだ歌を一首だけ載せているが、それは

あさがほの、いろはかなきと、おもひけん、はなよりさきに、きゆるものうき

とある。これに当る歌は、A類とB類には、次のように出ている。

あさかほを、はにはかなしと、おもふらん、花よりさきに、われそちるへき（A類）

あさかほを、なにはかなしと、おもひけん、花よりさきに、きゆるしら露（B類）

似通った歌ではあるが、傍線の第三句と第五句とは、どちらかと言えばB類の歌に近いと言って良いと思われる。

(7)三年過ぎて太子はくる国へ行き、姫宮の死を知る条　AC両類には、太子の夢に姫が現れ、恨み言をいうのに驚いて、くる国へ赴いたとあるが、〈刊本〉には、この記事が無い。その他は、ほぼ同じ内容であるが、A類にある五首の歌は〈刊本〉には無い。

(8)太子が姫宮の夢の告げにまかせ、こんてい駒に乗り、天空に昇って、大梵王宮に生れ替った姫宮を尋ねる条　〈刊本〉は、この部分が著しく簡略である。〈刊本〉は全体の本文の長さも、AC類諸本の三分の二弱と短いが、前条までと、この条以降の本文の割合を見ると、AC両類では二対一位であるのが、〈刊本〉では三対一位になっている。この天空の遍歴では、太子が道々で会う星や菩薩に大梵王宮への道を尋ねて行くのであるが、AC両類では、

①ゆふつつ星（けうやう菩薩）　②産星　③七夕　④七しやうの星（四三の星）　⑤明星（虚空蔵菩薩）　⑥月光菩薩（大勢至菩薩）　⑦日光菩薩（観世音菩薩）　⑧地蔵菩薩

となっている。〈刊本〉に欠けているのは、⑥⑦だけであるが、AC両類では、⑧の地蔵菩薩の教えの部分が非常に長い。そこには、三途の川と思われる大河や、上中下の三品往生の橋、奪衣の鬼神、憍慢地獄などの様が語られているが、〈刊本〉では、それらが無く、

ぢぞうぼさつはきこしめし、そのぎならはをしへ申さん、かたしけなくも、大くうと申は、此みちはるかにゆかせたまはゝ、あまたのみちあり、なかにも、くさのはへみちて、ものさひしきみちあらは、そのほうへゆき給へ、あまたの人のた

ちいでゝ、こなたへととむるとも、そのかたへはむやくなり、なかにも、みめよき上らうのたちいでゝ、とむるとも、かまへてゆかせたまふなよ、みなくげどうのともから也、そのみちはるかにゆかせ給へや、それよりちかく候ぞ、わかき人とのたまひて、おしへて、とをらせたまひける

というように、非常に簡略化されている。しかし、A類本に共通するやや長い脱文の個所（④と⑤の間）を、〈刊本〉は簡略ながら備えている。また、④の「七しやうの星（七曜の星イ）」（A類）を、C類は「四三の星」とするが、〈刊本〉も「しそうのほし」とあって、C類に近い。その他、〈刊本〉のこの条にはC類と同じく和歌が一首もないが（A類は八首）、B類の〈名古屋〉も、横山氏の解題によれば、終りの方（おそらく、天空遍歴の部分であろう）には和歌が少ないとある。

（9）太子と姫宮と再会の条　AC類は、大梵王宮に着いた太子が、黄金の筒井の側にある栴檀の木に登って待っていると、姫宮が水を汲みに現れ、井の水面に太子の姿が映っているのを見て驚くというように、彦火火出見尊の海宮行説話の型を借りているが、〈刊本〉は、

太子、此よし御らんして、つゝいのみつは、いつくのほとにてあるらんと、かなたこなたを見たまへは、つゝいのみつの見えけるを、するくとはしりより、こゝかしこをみたまへは、やうらくをみにまとい、まことにゆゝしき御ありさまにて、ひめきみ、をくよりいてさせたまひて、たかいにめとめをみあわせ、これはくとはかりなり

とあって、特別の趣向がなく、その後の、太子と姫宮との問答も、AC類よりはるかに簡略である。

（10）垂迹の条　ここも〈刊本〉は著しく簡単である。七六頁の（例23）に掲げたAC両類に当る〈刊本〉の本文は、

このよし、うかゝい申さんと、いそきをくへはしりいり、ほとけの御まへにて、此よしかくと有けれは、ほとけ、此よしきこしめし、一やのちきりにはかなくも、是まてたつねきたる事、ためしすくなきしたいなり、ほんのうといふはほたい也、こひといふはぶつしゆなり、くるしからぬ事なれは、つゝいのみづをあびせつゝ、しやばのすがたをひきかへて、つれてまいれと、の給えは、ひめきみ、なのめにおほしめし、たいしにみつをかけ給ひ、しやはのすかたをひきかへて、てにてをとりて、ほとけのおまへにいてられける

ほとけ、このよし御らんして、さてくなんちは、一やのち

きりにはかなくも、是まてたつねきたる事、ためしすくなきしたいなり、なんしはこれより、しやばにかへりて、しゆしやうをさいとあるへしと、こかねのはこを給りけり、いまよりのちは御みかなを、ひしやもんてんと、なをつきて、これよりいぬいにあたりて、ふくとくの山あれは、其山のぬしとなり、ふくとく、しゆじやうにあたふへし、をなしくひめもひきぐして、きちぢやうてん女と、なをつきて、こひぢのみちをかなふへし、両人いかにと有けれは

うけたまはると申て、はやつうりきぢさいのみとなりて、せつなかあいたに、しやばにかへらせ給ひて、かの山にわけいりて、くらまのやまとなつけつゝ、しゆしやうをさいどしたまいけり

のようになっていて、太子と姫宮以外の人物についての垂迹の記事が無い。ただ、AC類では、太子と姫宮は、大梵王から福徳山を与えられ、そこに住んだとあるのを、〈刊本〉は、傍線のように、その福徳山は娑婆世界にあって、それを鞍馬山と名づけたとする。つまり、鞍馬の毘沙門天・吉祥天女の本地物語に仕立てているのが特徴である。

さて、以上のように、D類の〈刊本〉は、ABC類の写本諸本に対して、叙述内容においても顕著な特徴の見られる伝本である。室町時代物語の類にあっては、江戸時代に刊本が出版されている場合、その系統の本文が流布している例が多いのであるが、この承応版「毘沙門天王之本地」と同系の本文を有する写本は、今までのところ見ていない。このことも、本書の特異性と関係があるのかもしれない。ところで、この〈刊本〉と、ABC類の写本との関係について見ると、上記のごとく、A類とは関係が薄く、BC類とは所々に類似のあることが認められる。ただし、C類は和歌を全部省略した伝本であるのに対し、〈刊本〉には、数は少ないが和歌が残っている所から見ても、C類と直接の交渉のあったことは考えられない。おそらく、全体としてはA類の祖本に近い形でありながら、部分的にC類と共通する所をもつ、B類系統の本から、〈刊本〉の本文は成立したのではないかと推測される。しかし、B類系本文の全貌が明らかでないので、あくまでも臆測にとどまることである。

次に、この〈刊本〉については、前記の信多純一氏の論考にある、説経との関係が問題である。本作の説経正本としては、左の諸本が知られている。

㈠毘沙門之本地　〔天満八太夫〕正本　六段　〔宝永八年〕う

ろこかたや刊　中一冊　岩瀬文庫蔵

(二)毘沙門之本地　天満八太夫正本　六段　〔正徳〕うろこがたや刊　中一冊（有欠）　慶應義塾図書館蔵

(三)毘沙門之本地　六段　〔宝永〕うろこかたや孫兵衛刊　半一冊　東京女子大学図書館蔵

(一)は、刊記に「卯正月吉日　うろこかたや　新版」とあるが、これは「貞享丁卯」の原刻本を「宝永辛卯」に複刻したものと推定されている（説経正本集第三解題）。本文に関して言えば、(一)(二)は全く同文、(三)は六段目の末に、やや長文にわたる異文個所がある。

右の説経正本と〈刊本〉とを比較すると、正本の五段目のはじめ、姫宮が太子の夢枕に立ち、筒井の浄土へ尋ね来れと告げる条までは、正本は〈刊本〉とほぼ同じ筋で運んでいる。〈刊本〉より省略された部分も多いが、詞章がほとんど同文の個所も随所に見られる。正本に出ている三首の和歌も、〈刊本〉と同じで、内二首は〈刊本〉特有の歌である。従って、〈刊本〉と正本とが、きわめて近い関係にあることは明らかである。おそらく正本は、〈刊本〉のような内容の古い正本にもとづいて、適宜に省略と改変を加えながら、本文を作ったのではないか。

たとえば、金色太子のもつ不思議な武具について、正本は

我ら家のてうほうに、きんせきおとしの大よろい、こんがふのかぶとをき、かたきに向て、矢のたつ事候はし、大とうれんと言太刀を、一ふりふれは、一度に千人のくびおつる也、かたきいか程有とても、いかてか打れ申へき

と述べるが、その後の、太子がまや国の軍勢に立ち向う条では、

太子、由を御らんして、馬につけ置ものゝくを、一〻に取出し、やがてしやうぞくなされつゝ、しゆほうといへるつえをつき、大りをさしてぞ入給ふ

とあって、前の所には無かった「しゆほうといへる杖」が出てくる。この杖は〈刊本〉には、前条にも出ている所を見ると、正本は、前条では〈刊本〉のような叙述を簡略化しながら、後ではそれを忘れて、省略した「しゆほうの杖」を出すという矛盾を犯したのであろう。

ところが、正本の五段目、太子が、こんてい駒に乗って出で立つ所からは、次のように〈刊本〉とは内容が著しく異なってくる。

太子は渺々とした広野に出る。大木の下に妖しい姥が大石に腰かけている。姥は、引き出されてくる罪人を、一人一人罪

を糺して地獄へ送る。太子は、姥に浄土への道を教わり、大河を渡ると、河原で幼い子をいつくしんでいる地蔵菩薩に会う。地蔵に尋ねて山路へかかり、七曜の教えで天の河に着く。七夕・彦星に会って天の河を渡り、さらに数多の僧に教えられて、ついに筒井の浄土へ到る。

このように、〈刊本〉では省略されていた地獄の様が、簡単ではあるが、また復活している。しかし、遍歴の間で道を教えられる順序は、八三頁に記載した草子系写本のそれとは逆になっている。そして、太子が姫宮と再会する条も、

太子が栴檀の木の本に駒をとめ、休んでいる所に、姫宮が天人と共に現れ、前の池に来て水を汲もうとすると、水面に太子の姿が映り、夢かと驚く。

となっていて、草子系写本の内容に戻っているのである。このように、正本の第五・六段は〈刊本〉から離れているのであるが、このことについて、信多純一氏は次のように述べられている。

かういふ所を併せ考へると、八太夫の正本は、承応板の草子系の本文によって、四段目までを作り、五六段の部分は、お伽草子系の読み本を参照して、かなり工夫して、改作してゐるやうに考えられる。もしさうでないとすると、承応の草子の拠った語り物とは別に、八太夫の正本の系統に近い本文をもった語り物が、別に他にあって、八太夫は、それによったと考へざるを得ない。

私も、右の信多氏の説に同感である。正本の五・六段に関しても、正本の形から〈刊本〉への変化は考えにくい。いずれにせよ、〈刊本〉は、現存の説経正本につらなる語り物系の古形を示すものと思う。

そういう前提に立って、正本の五・六段に当る、太子の遍歴から姫宮との再会のくだりに関して、ＡＢＣ類諸本から〈刊本〉へ、〈刊本〉から正本への、本文改作の経緯を推測してみる。〈刊本〉が、この部分を思い切って縮めているのは、説経としての六段構成に収める必要があったからではないか。正本の五・六段は、〈刊本〉三巻のうちの、ちょうど下巻に相当する。その下巻の中間に、

おいとま申てさらはとて、なみだとゝもにひきわかれ、ゆくゑもしらぬしらはまを、たとろ〳〵とまよはせたまふ、こゝろのうちのあはれさを、たとへていふへきかたもなし

〔挿絵　第十四図〕

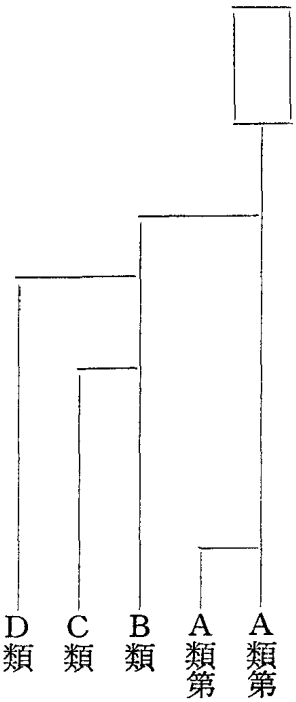
そのゝち太子は、いそがせ給ひてみ給へは、をしへすこしもたがはずして、さきよりも、いかにもたつとき御そうの、七八人みえたまふ

という個所がある。挿絵をはさんで、段分けがあったと考えて良いであろう。AC類の諸本では、〈刊本〉の下巻に当る部分は、上中巻に当る部分よりも、さらに長いくらいの分量がある。上中巻で四段分を費してしまうと、五・六段はよほど節略しなければならなくなる。そのために〈刊本〉は、地蔵菩薩の道しるべの言葉に出てくる地獄の光景を主として省略したのであるが、それは、それまでにいろいろの星が出てくる天界の遍歴の末に、地獄が出てくるということに、不自然を感じたからではなかったか。しかし、この種の地獄に関する話は、本地物のような唱導の目的をもった物語には、捨てがたいものである。そこで、現存正本は、再びこれを復活したのであるが、上記のような不自然さを解消するために、道順を逆にして、地獄を一番先に出してきたのではないか。正本は、金色太子が遍歴に出る最初を、

こんていこまにうちのりて、御めをふさき、むちをあて、行へもしらす出給ふ、しはらく有て、めをひらき、四ほうをきつと見給へば、たゝへうくたるひろきのに、出させ給ふそふしき也

と述べていて、AC類の草子のように、はじめから空に昇ったとはしていない。そして、地獄を過ぎ、三途の川で地蔵菩薩に会ってから、山路にかかり、はるかに登って天の河に着くというように、いわば合理的な順序になっているのである。

以上で、「毘沙門の本地」の現存伝本に関する考察を終る。最後に、ABCD四類の関係を総合して図示すれば、次のようになろう。



本作の原型に最も近いのがA類、それに部分的な改変を加えたのがB類、B類系から、さらに派生したのがC類とD類で、とくにD類は、説経系の語り物に仕立てるために、大きな改作を施した本ということになる。

本作は、毘沙門天・吉祥天の前生を語る本地物語である。本作の諸本のうち、古い説経節の本文に拠ったと思われる、承応三年版「毘沙門天王之本地」は、巻頭では、

ひしやもんてんわうのゆらひを、くわしくたづぬるに

と説き起すが、巻末では、

はや、つうりきぢさいのみとなりて、せつなかあいたに、しやばにかへらせ給ひて、かの山にわけいりて、くらまのやまとなつけつゝ、しゆしやうをさいどしたまいけり

として、鞍馬山に垂迹をしたと述べている。さらに、現存の天満八太夫系の説経正本になると、冒頭にも、

そもく、らくやう、くらまの寺に立給ふ、びしやもん天王のゆらひを、くわしく尋るに

とあって、鞍馬寺の毘沙門天の本地であることを、はっきりと打ち出している。しかし、草子系の諸本にあっては、鞍馬の名を全く出していない。上述のごとく、草子系の方が本作の古体を伝えることが明らかであるから、本来は「阿弥陀の本地」と同じく、特定の寺院に祀られる毘沙門天を対象にした本地物語ではなかったのであろう。

本作も「阿弥陀の本地」における「大乗毘沙門経」のように、物語構成の材料となった説話が何かあったのかもしれないが、今は明らかにすることができない。萩野由之氏は「新編御伽草子」の解題において、

この草子の趣は仏経を種として、小説に作れるものなるべけれども、其出典は知らず。祖庭事苑に、贊寧が僧史を引きて、唐の天宝元年西蕃の五国安西に来寇せし時、玄宗不空三蔵に詔して、仁王護国陀羅尼を持咒せしめしに、毘沙門天王第二の子独健、形を現じ、神人五百員ばかり、金甲を被て安西を救ひ、蕃寇を討ち退けし事を記せり。これなどやこの本拠ならんか。

と記され、また、津田左右吉氏は「文学に現はれたる国民思想の研究—武士文学の時代」の中で、

毘沙門の本地の女主人公は瞿婁国の王姫となつてゐるが、瞿婁国がマハアバラタの物語の産まれたところであることはいふまでもあるまい（但し物語の筋はマハアバラタとは関係が無いやうである）。さうしてこの姫君と契を結んだ維曼国の金色太子が、兜率の内院に上つて一度び失つた姫と再会するといふのは、ヅシヤンタ王がシヤクンタラ姫と犍陀婆の山上に於いて再会した話を想ひ出させる。これらは勿論、インド

の史詩や戯曲と直接の関係のあるものではなからうが、インド人の間に広く行はれてゐたそれらの物語、もしくはそれに類似したものが、形を変へて仏教の経典の何かに採りこまれてゐたのではあるまいか。

と述べられている。「祖庭事苑」に引かれる話は、類似がごく部分的なものに過ぎないし、津田氏の説も推測の域を出ない。

この本地物語は、毘沙門天や吉祥天女の前生にふさわしく、密教における天部の信仰によって彩られているのが特徴である。冒頭の申し子の条では、瞿婁国の大王は梵王に祈請したとある。A類本は「ほんはう」「ほんほう」「まんほう」「御方」などと書き、意味を解しかねた様子が窺えるが、C類本には「ぼんでんわう」、D類本には「だいぼん天わうぐう」とあるのをみても、梵王の意であったのであろう。梵王は梵天王とも言い、色界初禅天の主とされる。もとは婆羅門教において造物主とされる神であったが、仏教に入って、帝釈天と共に仏法の守護神となり、とくに密教において尊崇されていた。申し子は、この種の物語には通例のことで、本作のその場面の叙述も類型的であるが、祈請の対象を梵天とするのは異例である。

次に瞿婁国の天大玉姫の危難を救うために、維縵国の金色太子が現れる所も、初秋の月がくまなく照らす空から雲に乗って天下るという趣向を構えている。「梵天国」の場合と男女の関係が逆であるが、太子もまた、梵天から天下った天人であったことを思わせる語り方である。

さらに、この物語で最も力を入れて語っているのは、大梵王宮の黄金の筒井という所に生れ変った姫宮を、金色太子がこんでい駒に乗って尋ねてゆく後半の部分である。龍馬に鞭を当てて空に昇り、西へ向って三年飛び続けると、高い山に着く。それより山路を辿るうち、次々に出逢う僧体の者に、大梵王宮への道を問いながら先へ進む。その僧体は、A類本によれば、

ゆふづつ星（一切衆生を孝養菩薩）
彦星
七夕
七星（CD類「四三（しさう）の星」）
明星（虚空蔵菩薩）
月光菩薩（大勢至菩薩）
日光菩薩（観世音菩薩）
地蔵菩薩

となっている。ゆふづつは金曜（太白星）のこと、七星は北斗

七星、明星は虚空蔵菩薩の化現である明星天子、月光・日光も、勢至・観音二菩薩の化現とされている所を見ると、月天子・日天子のことである。これらは、いずれも密教における修法の対象となる諸天である。

津田左右吉氏が前掲書の中で指摘されていることであるが、室町時代に広く流布した「融通念仏縁起絵巻」で、大原良忍上人が鞍馬寺へ参詣した時、毘沙門天が化現して、上人の念仏に結縁した冥衆の名帳を奉呈することがある。その名帳の中に、北斗七星・日天子・月天子・明星天子等の名が見え、さらに画図にも、飛行する念仏結縁の諸天の姿が描かれている。その構図は諸本によりやや異なるが、フリア美術館本を見ると、まず上方に梵天、その左右に日天子・月天子が居り、下方に七星・九曜が描かれ、その先に、名帳を捧げる多聞天（毘沙門天）や、吉祥天の姿がある。「毘沙門の本地」に登場する諸天が揃っているが、さらに、その先には冥土の十王も並んでいる。地蔵菩薩の姿は見えないが、この画面は、金色太子の天界遍歴の次第の背景を物語っているように思われる。「融通念仏縁起」のこの場面の主役が、鞍馬の毘沙門天であることを考えると、ますます「毘沙門の本地」との関係が近接してくることを感じるが、それはともかくとしても、この本地物語は密教の天部信仰の上に成立したと言えるであろう。

その他の点でも、本作の物語としての筋立は、毘沙門天と吉祥天女の本地に洵にふさわしく作られている。吉祥天は毘沙門天の妹とも妃とも言われるが、密教では、吉祥天女を胎蔵界大日の所変とし、金剛界大日の所変たる毘沙門天王の妃と説いている（大日経疏）。その本地に、梵天王から下された瞿婁国の姫宮を設定し、姫と二世の契りを交しながら、今生で添い遂げられなかった金色太子が、天界遍歴の難事業の末に、大梵王宮で再会するという全体の構想自体も、二天の信仰上の関係を踏まえて、うまく出来ていると言えよう。さらに、「覚禅鈔」等に記す毘沙門天の形相は、身色黄金にして甲冑を帯すとある。金色太子の名はそれと関係があろうし、姫のために摩耶国を一人で退治するというのも、毘沙門天の軍神としての信仰によっての趣向であろう。一方、姫宮が絶世の美女というだけでなく、見る者を若やがせ、延命長寿の福を与えたというのも、福神としての吉祥天と顕れる人物なればこそである。

本地物には、物語の内容と、本地の対象とした神仏等との間に、あまり必然性がなく、他の神仏の本地に転用しても通るよ

うな作品も少なくないが、その点では、右のように本作は意図的に物語が構成されている。しかし、本地物に共通する、男女主人公の現世における苦難という主題に関しては、深刻さがあまり感じられない。同類の「阿弥陀の本地」などにくらべても、読者の涙を誘うような悲哀感が稀薄である。前述のごとく、本作は古説経としても行なわれていたと思われるが、「さんせう太夫」「しんとく丸」「をぐり」「かるかや」「愛護の若」など、古説経の代表的作品に纏綿する陰鬱な雰囲気からは遠い。後半の、金色太子の天界遍歴にしても、「諏訪の本地」の神道集や諏方系伝本における甲賀三郎の地底遍歴に、語り口は類似した所があるが、こんでい駒に乗って天空を駆ける太子の姿には、いかにもお伽話的な明るい世界が見られる。本作は、伝本における本文の異同から見て、そう新しい成立とは思われないが、中世の本地物の中では、いわゆる御伽草子という名の方がふさわしい内容の物語である。本地物本来の唱導の物語が、草子文芸に変ってきた標本となるような作品である。

梵天国 別名橋立の本地

「梵天国」は御伽文庫本二十三篇の一つとして流布しているが、他に、次のような諸本が伝存する。（〈　〉内は本稿で使用の略号）

○はしたて（題簽）〔江戸前期〕写　奈良絵本（挿絵欠）　横二冊　筑波大学図書館蔵　〈筑波〉

○橋立の本地（題簽）〔江戸前期〕写　絵巻　二軸　フォグ美術館寄託（「在外奈良絵本」（影印）「室町時代物語大成第十二」所収）　〈フォグ〉

○橋たてのほん地（題簽）存上巻　〔江戸前期〕写　絵巻　一軸　大英図書館蔵　〈大英〉

○ほんてんわう（内題）〔江戸前期〕写　奈良絵本　横三冊　笹野堅氏旧蔵（「室町時代物語集第二」所収）　〈笹野〉

○〔梵天国〕（仮題）〔江戸中期〕写本　横一冊　国会図書館蔵　〈国会〉

○ほん天こく（題簽）〔江戸前期〕写本　二軸　天理図書館蔵（「室町時代物語集第二」「室町時代物語大成第十二」所収）

〈天理〉

○ほんてん〔国〕(内題)有欠〔寛永〕刊　古活字版　大一冊

慶應義塾図書館蔵（「影印室町物語集成第一輯」所収）

〈古活〉

○ぽんてん国（内題）三巻（存上巻）〔慶安承応〕刊　絵入　半一冊　赤木文庫旧蔵（「室町時代物語集第二」解題掲載）

〈刊〉

○ほんてん国（題簽）御伽文庫版　横一冊　〈伽〉

以上の諸本を、本文によって類別すると、次のようになる。

A類　(イ)〈筑波〉
　　(ロ)〈フォグ〉
　　(ハ)〈大英〉
　　(ニ)〈笹野〉

B類　第一種　〈古活〉
　　第二種　〈刊〉
　　〈伽〉
　　〈国会〉

C類　〈天理〉

A類の四本は、本文・画図ともに明らかに同系である。画図の数では〈笹野〉が最も多く、全部で二十図（うち一図は見開き二頁分）ある。〈フォグ〉は十八図で、〈笹野〉の第十図と第十九図に当る図がない。〈大英〉は上巻のみで九図あり、〈笹野〉〈フォグ〉と同じである。〈筑波〉は挿絵がすべて切取られているが、その跡を数えると十六図で、〈笹野〉の第九・十八・十九・二十の四図が無い。このように、画図の数にはやや異同が見られるが、本文中の挿入個所は、すべて合致している。これによっても、四本は同じ絵巻か奈良絵本から転写を経たものであることが推測される。本文もまた、四本ほぼ同文であるが、〈筑波〉の本文を基本として、他本の主な相違個所を挙げれば、次のごとくである。

（例1）

〈筑波〉 A むかし、しゆんわてんわうの御とき、五てうのさたいしんたかふちとて、B ようかんことに、さいかくいみしきのみならす、四はうに四万のくらをたて、なにはにつけて、とほしき事おはしまさす、されとも、人けんのおもひつきせぬならひとて、いそちにあまらせ給ふまて、一人のけうしおはしまさす、つくくあんし給ふに、われさきの世に、C いかな

るつみをつくりてか、けんさいに、こといふことのなかるらん、[D]七八十のよはひをたもつとも、つゐにとゝまるへき世にあらす、なからんあとをも、たれかとふらふへき、いにしへいまにいたるまて、かみほとけに申事かなへはこそ、さるためしもあるらんとて、きよみつにまいり、一七日こもり、五たいをちにつけて、さんせん三百三十三とのらいはいをたてまつりて、一人のけうしを、なんしにても女しにてもたひ候へとて、色〳〵のくはんをそたてられける、もし此くはんしやうしゆせは、はなの御ちやうたい、こかねとしろかねにて三十三めんつゝ、まい月に三ねんかけて、まいらすへし、まひ月まんとうを、三ねんともしてまいらせん、[E]にしきの御ちやう七えつゝ、三ねんかけてまいらすへし、百人のそうをあつめて、ほつけ三まいのふたんきやうを、[F]みとせよませてまいらすへし、こんていのくはんをんきやう、三せん三百三十三くはん、[G]かゝせてまいらすへし、なんとの色〳〵のくはんをそたてられける

A〈笹野〉ナシ

B〈フォグ〉ようかんことにひれいに　〈大英〉ようかんひれいにことに　〈笹野〉ようかんひれいに

C〈笹野〉いかなるつみをかつくりけん、子といふ物のなかるらし

D〈フォグ〉百年(もゝとせ)の　〈大英〉たとひもゝとせの

E〈フォグ〉まいらすへし

F〈大英〉三とせよませて、御経三千三百卅三巻

G〈フォグ〉かゝせてまいらすへしと、かやうにいろ〳〵の　〈大英〉かゝせてまいらすへしと、色〳〵の

（例2）

〈筑波〉　そのゝちほとなく、きたのまんところは、たゝならすなり給ふ、[A]ほとなくわかきみ一人いてき給ふ、御なをはたまわか殿とそ申ける、日〻にせいしんしたまひて、ちゝの大しんとの、一ときも御身をはなさす、かしつき給ふ、五さいと申とき、大りへ[B]御さんたいありけるに、くそくしたてまつり給ふなり、ていわうきこしめして、いまたれいもんなき事なり、七さいのわらへてんしやうといふ事あれとも、五さいのせうてんはめつらしきなり、さりなから、たかふちかこの事なれは、[C]てうあひにおほしめしける

A〈笹野〉やう〳〵月日もまんしけれは、わかきみ一人

B〈笹野〉御さんたいあり

C〈フォグ〉君も寵愛し給ひける　〈大英〉〈笹野〉君もてう
あひにおほしめしける

（例3）

〈筑波〉みなみのゑんにたちいてゝ、あふきをほと〳〵とたゝき、なんたりうわう、はつなんたりうわう、あなはたつたりうわう、うはつらりうわう、とそめされける、くか一てんなかわき、すいてんはうるほすと、申つたへて候そかし、八りうわうのいきほひなれは、申もなか〳〵おろか也

A〈フォグ〉〈大英〉ナシ

（例4）

〈筑波〉ひめきみの給ふやう、日ほんあしはらこく、たうしんこくと申て、心かけんしんならすして、こゝにさりてかしこへゆき、あまたの人にちきりをむすふ、てんのならひにて、けんしんしくんにつかへす、ていちよりやうふにまみえすとて、一人にはたへをふるれは、又ことちきりはなさす、たとひあひみねとも、それとなつけをきたれは、もしちかふことあれとも、そのまゝに、おつとも女も、一しやうふほんなり、まして、かやうにたてまつり候つるに、まいれとおほせある、うたてのちうなこん殿や

A〈フォグ〉〈大英〉てんちくの

B〈笹野〉なれたてまつり候つるに

（例5）

〈筑波〉あしけむま、つきけむま、かすけむま、三ひきのむまあり、そのなかにも、あしけむま、ことにいたをはさみたることくにやせたり、此あしけむまをひきてかへりたまふ、ひめきみ御らんして、まくさなくてはいかゝあるへきと、のたまへは、ちうなこん、いかなるくさかひいるへきと、申させ給へは、いつもかねか卅りやういるへしと、おほせられけり、やすきほとのことなりとて、きてのくらをあけて御らんすれは、いつもかねこそおほかりけれ、三十りやうとりいたし、このむまにかはせ給ひけり、そのゝち、きよみつのたきより、水をくみよせて、三石はかりかはせ給ふ、くさくい、みつのみて、ゆんてめてにころひをうちて、身ふるひしてたちたれ

A〈笹野〉ナシ

B〈フォグ〉〈大英〉〈笹野〉きたのくら

C〈大英〉きん銀あまたあり

D〈笹野〉身ふるひしてたちたれは、しまのことくになりに

けり

（例6）

〈筑波〉 さて、ほんてんわうの大りは、いつくそとたつね給へは、これなるみちを、みなみへゆきて御らんせよ、すなはちたいりなるへしと申けり、うれしくおもひ、ゆき給ふに、けん〳〵へい〳〵として、[A]のにても山にてもさらになし、かきりもなくほとりもなし、したい〳〵にいさこの色、ひとへにこかねのいろなり、しろかねのもんをたて、こかねのとひらをたて、こかねのいさこ、あつさ一ちやうはかりにしきみてり、七ほうしやうこん、すへてこくらくせかひと、をとにきゝしにかはらす、あゆみいりて御らんするに、たまのきたはし、[B]たまのうてなのすたれをかけ、[C]ありかたくこそみえにけり、やゝありて、三十はかりなる、やうらくたれたる、てんにん一人きたつて、みなみへゆひをさしけれは、[D]めくれといふとおほしめして、みなみへめくりて御らんするに、日ほんの大りならは、ししんてんなとゝおほしきところに、七しやくはかりなる、るりのはしら二三ほんたち、[E]くはんてん也、こかねの御さのうへに、たまのゆかあり

A〈大英〉野とも山ともさらにわきまへす

B〈笹野〉たまのすたれをかけたり

C〈笹野〉ナシ

D〈フォグ〉南のかたへめくれといふと、おほしめして、めくりて御らんするに〈大英〉中納言殿こゝろえて、みなみへめくりて御らんするに

E〈大英〉ナシ

（例7）

〈筑波〉 廿四五なる天女、こかねのおしきに、[A]るりのてうし、ひさけを、もちていて、うちをきて、ものもいはてかへりけり、ちうなこん、心におほしめすやうは、[B]てんのならひには、かゝるくい物、さけを、のめといふはうなし、ほしきまゝにのむときゝしものと、おほしめし、なめて御らんするに、かうはしく、かんろのあちはひあり、さかつきにて、さしくみ〳〵、四つ五つのみ、うちをき給ふ、そのゝち、卅四五のてん女、[C]るりのこきに、[D]なかさ一しやくあるこめの、しろくうつくしきめしを、そなへけり、はしとりあけて、[E]まいらんとするところに、[F]そなはるまを、きつと御らんするに、かひこつのことくなるものゐたり

A〈フォグ〉〈大英〉〈笹野〉るりのさかつきをすへて、しろ

かねのてうし

B〈フォグ〉〈大英〉てんしのならひには

C〈大英〉るりのうつはものに

D〈大英〉なかさ一尺はかりなるよねの

E〈大英〉くはんとするところに

F《フォグ》そなはるたまを〈大英〉〈笹野〉そはなるまを

（例8）

〈筑波〉ちうなこん、A此ところはいつくと申と、とひたまへは、Bらせんこくにて候へ、御ぬしははらもんわうと申候か、一とせほんてんわうへおはしまして、ひめきみをうはひ申て、一のきさきにずへたてまつらんとて、御かうなるを、四わうてんわうのからめとりて、くろかねのろうにこめてをかれしか、C此大わうへそなはるよねをふくして、しんりきをたちまちゑて、ろうをやふりて、かのひめきみのあしはらこくにおはしますをうはひとりて、一のきさきにあかめかしつき給ふ

A〈笹野〉御しよはいつくと申と

B《フォグ》〈笹野〉これこそ、らせんこくにて候へ

C〈フォグ〉此大わうへすなはちよねをふくして、しんりきをたちまちえて〈笹野〉ときおりしも、あしはらこくのちうなこんといふ人へ、此大わうのそなはるよねをそなへけり、そのとき、ちうなこん、此はらもんのろうにあるを、ふひんにおほしめして、此めしをすこしあたへられけれは、たちまち大しんりきをゑて

（例9）

〈筑波〉たゝくそくしておち給へ、三せん里とふくるまもあり、A二せん里とふくるまもあり、Bそれにめされよ、三せん里とふくるまは、はらもんかのりてゆきぬ、C二せん里とふくるまにめされよとて、くるまよせに、きさきとちうなこん殿、のりたまひけるか、ひきやうしさいのくるまとは申せとも、はらもんわうのくるまなれは、ぬしの心やはちけん、さらにとふ事なかりけり、二せん里とひてこそ、はたらくにてもあるへけれ、いまた二せん里さへすきさるに、なにとてとはぬそと、Dおほせありけれは、そのときにとひけり、かゝりける所に、Eさらによとて、せいたかく色あかく、かみはやしほのことくなる女あり、人はぬれともまとろます

A〈フォグ〉ナシ

B〈フォグ〉《笹野》ナシ

C〈フォグ〉〈笹野〉二千里とぶ車あり、それにめされよとて

D〈フォグ〉おほせありける所に

E〈笹野〉はきら女とて

（例10）

〈筑波〉　さても二人の人〳〵は、わにのくちをのかれきたって、ゆめにみちゆく心ちしてゐ給ふに、ほんてんわう、これを御らんして、ゆめうつゝともわきまへす、A御よろこひなされし事かきりなし、B ゆめうつゝともさらにおほしめしわけす、C さてもひめにてありけるか、いかにしてこれまてきたるらん、こんしやうにては、たいめんかなひかたきとおもひしに、うれしく候とて、御そてにすかり給ふ

A〈フォグ〉御よろこひかきりなし　〈笹野〉御よろこひはかきりなし

B〈フォグ〉ナシ　〈笹野〉ゆめともさらにおほしめしわけす

C〈フォグ〉さて〳〵ひめは

右のほかにも、語句の末の助詞・助動詞などにおける小異は少なくないが、比較的大きな相違は以上のごとくである。これを通観して、まず一本だけの異文個所を数えると、

〈筑波〉（例5）B　（例7）AF　（例8）B　（例10）AB

〈フォグ〉（例1）E　（例2）C　（例7）F　（例9）D

（例10）C

〈大英〉（例1）F　（例5）C　（例6）ADE　（例7）CD

E

〈笹野〉（例1）AC　（例2）AB　（例4）B　（例5）AD

（例6）BC　（例8）AC　（例9）E

となる。右はおよその目安に過ぎないが、数量的には〈笹野〉が際立って多い。その内容を見ても、（例1）C、（例2）A、（例5）D、（例6）C、（例8）C、のように、顕著な異文を多く含んでいる。そして、どれも他本と較べると、その部分の叙述としては〈笹野〉の文の方が良いように思われる。（例8）Cの個所などは、とくにそう言えるであろう。また（例5）Dでは、中納言が天空へ昇る馬について、〈笹野〉だけに「しまのことくになりにけり」という一句が加わっている。「しま」は紫磨であろう。その前に、いづも金を三十両馬に喰わせたとあることから、紫磨金の色になったと付け加えたのではなかろうか。なお、B類の版本系にも、紫磨のごとくになったという文が入っているので、そちらとの関係も考えねばならないが、A類諸本の中にあっては、〈笹野〉のこういう異文個所は、独自の改訂増補であったといってよいのではないかと思われる。

一方、独自の異文個所が最も少ないのは〈筑波〉である。上記の六個所のうち、（例5）B、（例7）AF、（例8）Bの四個所は、単純な誤写や脱字であって、意図的な改変ではない。（例10）Bは、すぐ前にも「ゆめうつゝともわきまへず」という、同じ意味の文があって重複している。しかし〈笹野〉にも、「うつゝ」の一語だけを欠く形で、やはりBに当る句が入っているので、むしろB全体の無い〈フォグ〉の本文の方が新しいのであろう。

次に、四本の間で目につくのは、〈筑波〉と〈笹野〉、〈フォグ〉と〈大英〉の、それぞれ二本の合致している個所が、

（例1）DG、（例3）A、（例4）A、（例7）B

のように見られることである。とくに（例4）A、（例7）Bのごとく、〈フォグ〉と〈大英〉が同じ誤りを犯していることは、この二本が親近な関係にあることを示している。一方、〈大英〉は比較できるのが上巻だけであるのに、前記の通り独自の異文個所もかなり多い。従って、〈フォグ〉と〈大英〉は元本を同じくしながら、〈大英〉の方は独自に本文を改めた所が多かったということになろう。さらに、〈フォグ〉〈大英〉の二本には、〈笹野〉とのかかわりの見られる個所がほとんどない。（例7）Fでは、

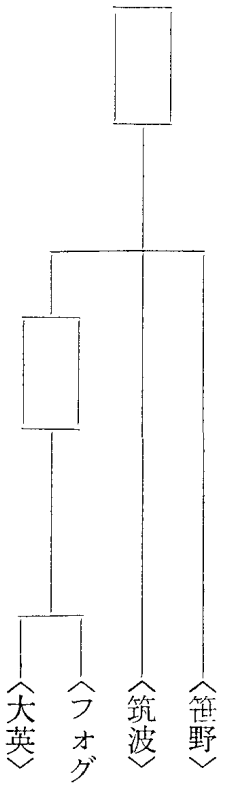
〈筑波〉そなはるまを　〈フォグ〉そなはるたまを
〈大英〉そはなるまを　〈笹野〉そはなるまを

とあって、〈大英〉は〈フォグ〉と異なり、〈笹野〉と一致するという異例を見せている。この個所は文意の上からいうと、「そはなるまを」が正しい。おそらく〈筑波〉は単純な誤写であり、〈フォグ〉は意味を解しかねて「そなはるたま」としたのであろう。〈大英〉と〈笹野〉が一致したのは、たまたま両本が正しい本文を伝えたということではなかろうか。

最後に、四本または三本が、それぞれに異なる個所も、（例1）Bや、（例9）ABCの一連の文に見られる。（例1）Bの場合は、〈フォグ〉あるいは〈大英〉の文が原型で、〈筑波〉は「ひれいに」を脱し、〈笹野〉は「ことに」を略したもののように思われる。（例9）ABCは、〈大英〉の欠巻部分であるので三本が対象になるが、ここでは、BCにおいて〈フォグ〉と〈笹野〉が一致する。Aが〈フォグ〉だけに無いのは、文脈から見て誤脱と考えられるので、この個所は〈笹野〉の本文が原型なのかもしれない。〈筑波〉は〈フォグ〉〈笹野〉のようなCの部分に目移りして、Bの一句を入れてしまったために、「め

されよ」の語がBCの両方に重複する結果になったのではないか。

以上を総合すると、A類四本にはそれぞれに誤脱改変があって、たがいに補い合う関係が見られるが、全体として祖本の本文に比較的近い形を伝えるのは〈筑波〉であり、最も意識的な改変の多いのが〈笹野〉ということになる。そして〈フォグ〉〈大英〉の二本は、〈筑波〉の上位にある本から、〈笹野〉とは別の経路で、共通の元本を経て分岐した伝本なのであろう。これを図示すれば、左のごとくになる。



次にB類は、A類の写本系に対し、版本系の伝本である。最古版の古活字本（無挿絵本）は、慶應義塾図書館所蔵の一本のほか所在を聞かないが、その慶應本も全丁にわたって下半部が破欠しているために、本文の通らない所が多い。また、次の慶安承応頃の刊本（絵入）も、戦前の「室町時代物語集第二」に、当時横山重氏の許にあった上巻だけの零本の書誌が載っているが、現在は存否不明、ほかに同版本が未だ発見されないので、内容を知ることができない。横山氏の解題によれば、上巻に関しては、本文は御伽文庫本とあまり違っていないとある。なお、写本の中の国会図書館本は、御伽文庫本と全く同じ本文である。おそらく御伽文庫本の本文を写したものと思われる。そこで、B類に関しては、〈刊〉と〈国会〉とは対象から除外し、〈古活〉〈伽〉の二本について考察する。

〈古活〉と〈伽〉は、本文の骨格を同じくするが、ほとんど同文に近い部分の間に、所々に異文の個所を交えるほか、〈伽〉に簡略化された所が多く見られる。若干の例を挙げてみる。

（例11）

〈古活〉

そののちけかふありて、ほとなくきた□□たくはいにんあり、わかきみ一人うみたまふ、やか□□ま若殿とて、よろこひたまふ、日にましてせいし□したまふに

〈伽〉

其のち下向ありて。ほどなくきたの御かた。くはいにん有。わかぎみ一人うみ給ひ。やがて玉若殿とて、よろこび給ふ。日にまして。せいじんし給ふにつけて。

つけて、ひかるやうにそおはしける、□□の大しん、一ときも御身をはなさず、かしつきた□□

□さいと申とき、大りへ御さんたひありけるにも□□くしたまふ、てい玉きこしめして、いまたれいも□□□とかな、七さいのはらは天しやうと申事□□□、二さいの天しやうはめずらしきこと□□□□か子の事なれはとて、A丸もてうほう□□□□すとて、させうへんにそ、ぢもく有、四位のし□□□したまひて、くきやうのさへそめされ□□□□□□はしめには、しるしなくてはいか□□□

ひかるやうにぞおはしける。ちゝの大臣。一時も御身をはなさず、かしづき給ふ。

二さいと申とき。だいりへ参内有けるにも。くそくし給ふ。天皇きこしめして。いまたれいもなきことかな。七歳のわらは。てんじやうと申事はあれ共。二さいのてんじやうはめづらしき事也。たかふぢが子のことなればとて。四位のじじうになし給ひて。くきやうのざへぞめされける。しやうてんのはじめに。しるしなくてはいかゞとて。たんごたじま両国を給はりける。だいじん、なのめならず御よ

□□□□□□りう国を給わりける、大しん、なのめならす御よろこひあつて、いよ〳〵いつきかしつき給ける

やう〳〵B五つ六つにもなり給へは、よの人の十はかりにもすくれて、ちへさいかくをわしけり、七さいにもな□給へは、ことにすくれて、ふへをそふきたまふ

ろこびありて。いよ〳〵いつきかしづきたまひけるほどに

やう〳〵七さいにもなりたまへは、ことにすくれて、ふえをぞふきたまひける

右のように、ABの二個所の文が〈伽〉には無いが、そのほかの部分は、語句の末の小異を除いては同文と言ってよい本文である。そして、ABの文が無くても、〈伽〉の本文に不都合な所は見られない。不注意による脱文ではなく、〈伽〉が意図的に省略したものと考えてよいであろう。

（例12）

〈古活〉　　〈伽〉

（一）てんわうよりのせんしにに（ママ）　　てんわうよりのせんじには。

は、なんちかふさい、七日大りへまいらせよ、それかなわすは、□れうひんと、くしやくのとりをめしよせ、七日大り□□まわせてみせよ、丸かこいの心をなくさめん、それ□□はすは、日本国には、A かなふましきよし、おほせくた□□けり、かしこまつて候とて、はれ〳〵御やとへかへ□□ける、ひめきみにあひ給ひて、B しか〳〵の事おこ□□んしにかふむりて候らへと、申させたまへは、C 心く□□くなおほしめしそ、身つからかちゝの大りのいけ□□候へは、よびよせてまはせ候はんする

なんぢがふさい。七日だいりへまいらせよ。それがかなはずは。かれうびんと。くじやくのとりをめしよせて。七日だいりにてまはせてみせよ。まるが心をなぐさめん。それにもかなはずは。日本国には。A かなふまじきとの、せんじなり。うけたまはると申。急ぎやかたへかへられける。姫君をちかづけ。B 此由かくと、かたらせ給へば。それこそ、みづからが父の。だいりにいか程も候ぞ。よびよせてまはせ候はんとて。

(二)さりなから、□□でんのとりなれは、わつかのしやうこくは、せはく□□かなふましきと申へし、たましひはかりよひく□□て、まはすへし、イ 物見五つの御たから物、五とくのにし(ママ)にしき入へしと、申されけれは、やすきほとの事とて、五とくのにしきを、あかちとあおちと、二たんとり出じ、ひめきみにたてまつりたまふ、ごとくのにしきにて、かれうひんとくしやくのとりを、三しやくにぬい、こかねしろかねのはこ二つに是をいれて

(三)みなみをてのゑ(ママ)んに出て、かれうひんの御こへにて、みなみおもてに出て。かれうびんの御こゑにて。ぼん

ほんてんこくのとりとそめされける、そのゝちは、D はこのふたをあけて御らんすれは、二つのとり、はねつくろいおそしける、はや大りへもたせて参り給へとあれは、中しやうははうのくるまにのりつゝ、大りへまいられける

(四)大りには、いまたきこしめしおよはれぬ事なれは、ゑにかけるかたちをこそ御らんしけれ、まさしく□□きのあるへし、やかてこゑ〳〵にいさみ給ふ、く□□はく、くきやう、天上人、さらに物ものたまわす、さ□□□給ふ、しゝいてんのみなみのゆかにて、はこのでんこくの鳥とそめされける。せつなが間に参りける。姫君なのめに思召。中将殿に奉れば。みかどへつれてさんだい有。

御門えいらんまし〳〵て。

ふ□□□らき、二つのとりをとりいたしけり

(五)ことのたとへ□□そ、かれうひんのこゑとは申ったへ候へ、をもし□くさへつりて、E くしやくとかれうひんと二つの□□□みたれてまふほとに、ものによく〳〵たとふ□□、□のこくらくの七ほうしやうとのみいけかと、ほむ□□のねふりをさまし、をの〳〵かんるいをなかして□□むしける、

F 七日と申には、もとのはこにそおさめける

ことのたとへにこそ。かれうひんのこゑとは申ったへたり。おもしろくさへづりて。ふたつの鳥が。いりみたれて舞程に。ものによく〳〵たとふれば。かの極楽の。七宝じやうどの御いけかと、ほんなふのねふりをさまし、をの〳〵かんるいをながして御らんじける

ここでは、CEのように（例11）と同じ小さな省略が〈伽〉にあるほかに、ABのように表現を少しく変えている個所も見られる。さらに〈古活〉の第二段に当る一節が〈伽〉に全く欠け、それに関連して、第三段から第四段にわたって、Dの省略をは

じめ、本文全体の改変、簡略化が行われている。第五段になると、やはり前段に関連するFの省略のほかは、再び同文の本文に戻っているが、この第二・三・四段の部分は、叙述内容に及ぶ大きな改変である。〈古活〉では、迦陵頻と孔雀を五徳の錦で作り出し、それに魂を入れたとあるのを、〈伽〉は、直接梵天国から本物を呼び下したとしている。

（例13）

〈古活〉

（一）はしめのあしけ馬、いまゝてはありともをほへさりけるか、参りていはひけり、なをりす（行カ）へもたのもしくて、うちのりたまふ、A はしめのことく、りやうかんをつよくふさきたまふに、またこくうにあかり、わかちやうのみちならは、十里はかりゆくほとゝをほしくて、ろくちにむまはとひつきぬ、

〈伽〉

はじめのこま、今まではありともおぼえざりけるが。まいりていはひける。猶ゆくすゑはたのもしくて。うちのりたまふ。やゝありて。ろく地にこまはとびつきぬ。御めをひらき御らんずれば。花の都。B 五条のやかたにつき給ふ。御めをひらき御らんすれは、目ほん花の都、B 五てうのはし、ひんかしのつめにそつきたり、C むまはあたこへあかりけり

（二）ちうなこんは、五てうのあたりにて、ことの□うおそとひたまふ、わらは三人いたりけるか、中□□こさかしきはらんへ、すゝみいて申けるは、み□□には此ほと、もつてのほかにさはく事候、なに□□候やらんとひ給ふは、ハ 五てうのちうなごん殿ゝ□□なけきあるやらんと、天かのさはきにて候、しらせ□□ぬかとそ申ける、まことなりけるよとかなしく□□が御しよへ

もをはしまさす

(三)すくに大りへさんた□□りけれは、Dめんほくなきあはれさ、一かたならすを□□めして、御たいめんさへなかりける、ほんてんわふの□じひつの御はんをまひらせけれは、ふしきさよとて、なひしやうれうのくらいにおさめられけり

すぐに内裏へさんだいあり、ぼんでんわうの自筆の判をまいらせければ。ふしぎさよとて。ないしやうれうのくらゐにおさめられけり。

ここも、ACDの文が〈伽〉では省略されているほかに、〈古活〉の第二段に当る一節が〈伽〉には無い。〈古活〉では、第一段末のBで、梵天国から帰った中納言は、五条橋の東詰に着き、付近の童から我が館に異変のあったことを聞くが、ともかく内裏へ参内して、梵天王から授かった自筆の判を献上したとあるのを、〈伽〉は、馬は中納言の館に直接飛び着いたが、そのまますぐに参内したとしている。この後、〈古活〉は我が館に帰り、姫君の奪われた跡を見て悲しむのであるが、そこの所は〈伽〉も同じ叙述である。そこで〈伽〉では、はじめにも館に着きながら、気にかかっていたはずの姫君のことは放っておいて参内したというような、不自然な運びになっている。これは、〈伽〉が〈古活〉の第二段を省くために、Bの文を不注意に改変した結果であろう。

以上の三例でほぼ明らかなように、〈伽〉は〈古活〉の本文を継承しながら、適宜に簡略化を加えた本と言えるが、さらに、このB類二本の相違個所を、A類諸本の本文と比較すると、いっそう明白となる。前掲三例における〈古活〉と〈伽〉の相違個所に相当するA類の本文を次に掲げる。(A類本としては〈筑波〉を使用し、必要に応じて他本の校異を注記する。)

(例11)

A　さりなから、たかふちかこの事なれは、てうあひにおほしめしける、すなはち、ちもくをはしめよとて、させうへんちもくあり、四ゐのしゃうになしたてまつりて

B　やう〳〵六つ七つにもなり給ふ、よの人にこえて、さいかくことにおはしけり

(例12)

A　日ほんこくには、かなふましきよし、せんしをくたされける、ちうしやう、かしこまつて候とて

B　ひめきみにあひたてまつり、かくのことくのせんしをかうふりたるよし、申されけれは

C　ひめ君、なにをかつよく、心くるしくおほしめし候そ

第二段　さりなから、てんのとりなれは、わつかのせうこくは、せはくしてかなふまし、たましゐはかりをよひくたし、みせんするか、イかものみやのたから物、五とくのにしきかいるへしと、おほせありけれは、やすきほとの事とて、五とくのにしきを、あをちとあかちと、五たんめしよせて、ひめきみにたてまつる、五とくのにしきにて、かれうひんとくしやくと、二の鳥のかたちを三しやくにつくりて、こかねとしろかねと、二のはこにいれて

第三段　みなみおもてのゑんにたちいてゝ、かれうひんの御こゑにて、ほんてんこくのかれうひん、くしやくのとりとて、めされけり、そのゝち、このはこのふたをあけて御らんするに、ふたつのとり、はつくろひをしけるを、はやたいりへもたせてまいりたまへと、おほせけり、ちうしやう、ロ八ようのくるまにのり、大りへまいりたまふ

第四段　たいりには、いまたきこしめしもをよはれす、ゑにかけるかたちはかりこそ御らんすれ、かゝるふしきの事なしとて、てんわうも、きさきをはしめたてまつり、くはんはく、くきやう、てんしやう人、さゝめきつれてまいり給ふ、しゝんてんの御ゆかにて、はこのふたをひらくなり、二つのとりたちいてゝ、あそひけり

E　くしやくとふたつのとり

F　七日と申に、もとのはこにおさめける

（例13）

A　はしめのことく、りやうかんをつよくふさき給ふ、こくうへあかり、わかてうならは、十里ほととおほしくて、ろくちにむまつきにけり

B　五てうのひかしのはしのつめにそつきにけり

C　むまはあたこのたけにそのほりけり

第二段　ちうなこんは、五てうにいらせ給ひけり、わらんへとも二三人あそひけるか、中にもこさかしきもの、すゝみいてゝ申やう、みやこはもつてのほかのさはきにてさふらふそや、何事にてあるととひ給へは、ハ五てうのちうなこん殿うせ給ひて、ほとなくこくわうまて、御心なやませ給ふ、てんにんも、なに物かとりつらん、くろくもひとへきたつて、うちおほひ、ゆきかたしらすうせて候、さこそちうなこん殿、御

なけきあらんと、てんかさはきにて候、いまたしらせ給ひ候はすやと申ける、さてはまことにてありけるとて、なく〳〵わか御しよへもいらせたまわて、すくにたいりへ御さんたいありて

D　あはれひとかたならすおほしめして、御たいめんもなく

以上のように、〈古活〉と〈伽〉の間に見られる相違個所のすべてにおいて、A類本は〈古活〉の方に近い本文を有している。そして、傍線のイロハの三個所は、〈古活〉の本文では文意が通じなくなっているが、A類本文によって正すことができる。イの部分の〈古活〉の本文「物見五つの御たから物」は、A類本の「かものみや」によって考えると、「もの」を「物」に、「みや」を「五つ」に（宮と五の草体の類似によるか）誤った所から生じたものであろう。このような例はA類本と〈古活〉の間に、いくつか見られる。たとえば、

〈筑波〉　かのしやうみやうこしの、はうちやうのまに、三万六せんのゆかをならへけるも、おもひしられて、いとたつとくもありけり

〈古活〉　かのしやうめう、うし□□□□□□□□□□三万六千のゆかをならへけるも、おも□□□□□□□たつとくて

〈伽〉　かのしやうめう。うしろのはうちやうのまる。（ママ）三万六千のゆかをならべけるも。おもひしられて。いとたつとくて。

〈古活〉には破損のための欠字があるが、ここは〈伽〉と同文と思われる。〈伽〉の「うしろの」は、〈筑波〉の「こしの」の「こ」を「う」と誤った所から生じたことが明らかである。〈古活〉がA類本の本文を誤解し、それを〈伽〉が承けついだのである。また、梵天国の姫宮をさらった羅刹国鬼王を、A類本は「ばらもん王」とし、〈古活〉と〈伽〉は「はくもん王」とする。これもA類本の「婆羅門王」が正しく、〈古活〉〈伽〉は「く」を「ら」と読み違えたのであろう。

A類本と〈古活〉との本文を比較すると、全篇を通じて、つかず離れずといった関係で叙述が運ばれているが、やや〈古活〉が省略をしている部分もある。一例を挙げれば九七頁の（例8）に続く本文が、〈筑波〉と〈古活〉とでは次のようになっている。

〈筑波〉　さてひめきみは、たはかり御らんせんとおほしめして、みつからはゝの御けうやうにて、せん日のあひた御きやうとくしゆにて、へちに大りをたてゝ、あさゆふとふらひて、せん日もまんせは、ともかくもおほせにしたかはん、それま

てはいとまをたへと、おほせありけれは、はらもんわうも、きさきの御すかたにめてゝ、おほせのことくに、へちに大りをたてゝ、あかめ申て、一日に三とつゝ、御ゑんまて御いてにて、きさきの御すかたを御らんしてかへり、わかところにおはします

〈古活〉ひめきみのはゝきやうやうとて、千日のきやうを、へちに大りをたてゝ、すみをはします

〈古活〉の本文は簡略すぎて、表現不足の所があるが、これも〈筑波〉のようなA類本の本文を節略したためであろう。ちなみに〈伽〉は、この部分の〈古活〉の本文を、次のように改めている。

〈伽〉此ころは、ひめ君の御母けうやうのためとて。(ママ)へぢにだいりをたて。千日経をよみ給ふなり

なお、九五頁の(例5)Dの所の〈古活〉の文は、

〈古活〉身ふるいしてたちたれは、しまのことくになりにけり

とある。A類本の中で傍線の一句のあるのは〈笹野〉だけであるが、その他では〈古活〉が〈笹野〉と特に関係する個所が見られないので、〈古活〉がA類本のどの本と関係するかを特定することはできない。

以上によって、B類の〈古活〉は、A類系統の写本を下敷にして本文を作ったと認められる。そして〈伽〉は、さらに〈古活〉の本文によって、それに省略と改変を加えたわけである。ただし「梵天国」には前記の慶安承応頃の刊本があり、万治二年の書籍目録にも「ぼんでんこく」と出ている。おそらく整版本も寛永以降の早い時期に出版されていたと思われる。〈伽〉の挿絵を「室町時代物語集」に掲載されている慶安承応頃刊本の挿絵一図と比較すると、構図がほとんど一致している。〈伽〉は〈古活〉を直接に承けているのではなく、多分〈古活〉以後の絵入整版本に拠ったと考えるべきであろう。

最後にC類の〈天理〉は、上記のAB類とは全く異なった本文をもつ特異な伝本である。本書は、現在は絵の無い巻子本になっているが、元は半紙本の大きさの縦形奈良絵本であったらしい。袋綴であった時の折目の跡があり、所々が散し書きになっている。挿絵を切り取って、本文だけをつなぎ合せ、巻子に仕立てたのであろう。

この本については、夙に信多純一氏が「説経正本集第三」に

収載の「梵天国の諸本」において、草子系に対する語り物系の性格をもつ伝本であることを明らかにされている。本作の語り物系に属する伝本には、次の説経や古浄瑠璃の正本がある。

（説経）

○梵天国　六段　写本　中一冊　　赤木文庫旧蔵

本書は桑名の仏眼院に伝来した、珍しい写本の正本である。書写年代については、横山重氏が史料編纂所に鑑定を求めたところ、慶安前後とのことであった由であるが、信多氏は、本文冒頭の序詞から見て、万治頃か寛文初年頃まで年代を下げたいとの意見を出されている。

○ぼん天こく　六段　江戸山形屋刊　中一冊

ケンブリッジ大学図書館蔵

刊記に「丑三月吉日　油町山形屋新板」とあるが、「説経正本集第三」の解題で、横山重氏は、貞享二年乙丑に鱗形屋で刊行したものが原刻本で、本書はそれを元禄十年丁丑に、挿絵を減らして複刻したものと推定されている。

○ほん天こく　六段　〔宝永初〕うろこ形や孫兵衛刊　半一冊

赤木文庫旧蔵

本書は、前掲山形屋版の原刻本の構図を借りて、鳥居清信が挿絵を描き、説経半紙本シリーズの一として刊行した本とある。

○ぼん天こく　六段　正徳三年〔江戸〕刊　中一冊

尾崎久弥氏蔵

本書は、前掲鱗形屋版の複刻であるが、少しずつ省略をしている。

以上の他に、水谷不倒氏が「絵入浄瑠璃史」の中で、元禄頃江戸版の石見天満八太夫正本を挙げているが、この本は所在を聞かない。なお、上記の山形屋刊本以下の正本も、天満八太夫系の正本と推定されている。

（古浄瑠璃）

○〔ほん天国〕　六段　寛文元年山本九兵衛刊　半一冊

赤木文庫旧蔵

○ぼんでんこく　六段　延宝四年鶴屋喜右衛門刊　半一冊

筑波大学図書館蔵

右の寛文版は「古浄瑠璃正本集第五」所収。延宝版は、挿絵は寛文版によらず、構図を新にしているが、本文は寛文版とほとんど変らない。

以上のように、説経に四本、古浄瑠璃に二本の正本が現存する。

仏眼院伝来の写本の正本は、漢字をたいへん多く交えた本文である。冒頭の一節を挙げてみると、

一、偖も其後、凡父母の孝行は、とうらい二世のめう感也、三界導師の釈尊も、因位の昔は凡夫にて、仏果をもとめん便りもなし、然るに太子十九にて、父母敬養の御為に、御出家成らせ給ひしより、終には、一乗妙典の悟を開かせ給ひ宛、三界導師と成り給ふ、是孝行のとくゆふ也

のごとくである。宛字も多く使われている。刊本の正本に拠りながら、漢字を多く使って写したものであろうか。

この写本の正本の内容を、上述のAB二類の草子系と比較すると、次のような特徴が見られる。

(1)前記の序詞につづいて、「偖、本朝の様には、丹後の国、なりあひの観世音、きれとの文珠の由来を、委しく尋るに」という一文がある。

(2)「仁王五十三世、淳和の御宇天長年中の事成ルに、若狭丹後の郡代をは、五条の中将高則と申也、御父は五条の大臣高藤と申奉ル、清水の観世音に祈(ママ)ひして、さつかり給ふ御子なれは、慈悲哀愍の御容身、三十二相を具宛、御器量世にまた類ひもなく、詩歌管絃に至迄、学残せる道もなく、上中下に至迄、いつきかしつき奉ル」とあって、申し子の場面の詳しい叙述が無い。

(3)主人公の童にての参内、除目のことなども無い。

(4)帝は梵天国の姫宮を入内させようとし、中将が断ると、軍勢を差し向ける。中将の御内に桑原左近大輔頼家なる者が奮戦し、軍勢を追い返す。そこで帝は改めて難題を言い掛けるという運びになる。

(5)帝の難題は、伽陵頻と孔雀、鬼の娘の十郎姫、天の鳴神、梵天王の自筆の判で、草子と同じであるが、記事内容には次のような違いがある。

(イ)十郎姫の条で、宮中の人々が十郎に和歌をよませたり、琵琶・琴をひかせたりすると、何事も見事な腕を披露するので、何故に汝は中将の妻に順うのかと尋ねるという記事がある。

(ロ)鳴神の条で、宮中に雷が鳴り渡った時、中将が桑原頼家に命じて静めさせたとあり、雷の時「桑原」と唱えるのは此に始まるという起源説明が付いている。

(6)梵天国へ昇る龍馬を、中納言が清水観音に祈請して授かったとあり、草子系の、姫宮の教えで愛宕山から連れてきた

とするのと全く異なっている。

(7)梵天国へ昇る時、中納言と姫宮の間で、次の別れの歌を詠み交す記事がある。

今はとて、わかれ行身を、思ひしれ、しらぬ旅路の、空に恋るゝ（中納言）

わかれ行、末も住越、里なれは、しはしめかるゝ、程そ悲しき（姫宮）

(8)梵天国から帰った中納言は、とある寺で出家を遂げ、西国をさして下る途中、大物の浦で、清水観音の化身である翁の船に乗せられて、羅仙国に着く。海路で暴風に逢うことは草子系と同じであるが、観音が直接中納言を導くのが異なっている。

(9)羅刹国で、但馬と丹後の翁姥から、中納言が親切を受けることが無い。浜辺で中納言が吹く笛の遠音を、婆羅門王が聞きつけて呼び寄せたとある。

(10)婆羅門王が隣国の王に呼ばれて出立する理由を、合戦の加勢のためとしている。

(11)羅刹国を飛車に乗って遁れた中納言と姫宮が、婆羅門王に追われて危うかった時、梵天王の命を受けた韋陀天に助けられる。草子系の、迦陵頻と孔雀が飛び来って、婆羅門の車を蹴落すことが無い。

(12)中納言が無事羅刹国から日本へ帰った後、梵天王の自筆の御判を内裏へ献上する。草子系では、中納言が梵天国から帰るとすぐに御判を献上し、それから姫を尋ねて旅に出るとある。

(13)梵天王の御判を、五条の内に社を立て、父高藤を勧請して、そこに祀ったとある。

(14)羅刹国で中納言に親切にした翁姥のことが無いので、老夫婦が鍵取の御前と顕れたという記事も無い。

このように写本の正本は、草子系との間で、かなり大きな相違を示している。

山形屋版以下の説経正本も、右の写本の正本の特徴をすべて備えているが、詞章には異同が多い。たとえば、(7)の中納言と姫宮との別れの歌は、次のようになっている。

めをふさく、こゝろ斗や、おもひしれ、つゆけきたびの、ひとりねをのみ（中納言）

たひたちし、きみを見るめの、なみだ川、ふかき思ひを、いかにせんとは（姫宮）

また(13)の条で、五条に立てた社を、西洞院の「天しのみや」とし、「さればにや、てんしとは、天のつかいとかくとかや」と言っている。

一方、古浄瑠璃正本は、大筋は説経正本に近い内容であるが、部分的には次のような相違があって、草子系にやや近い所が見られる。

(1)説経のような本地を説き起す形式句が無い。

(2)申し子のことが全く無い。

(3)梵天国の姫宮が天下って、中将と契りを結ぶ所に、小鳥尽しの景事がある。

(4)説経の(5)の(イ)の条で、十郎姫は帝の前で歌舞を披露する。中将の妻に順う理由を尋ねることは無い。

(5)梵天へ昇る時の、中納言と姫宮との別れの歌は次のようである。

めをとぢて、君がすがたの、みへばこそ。せめてなこりの、こゑぞこひしき(中納言)

たび立て、君をみるめの、泪こそ、何とこたへん、事のはもなし(姫宮)

この歌は、説経の中では、山形屋版以下の刊本の方に近い。

(6)梵天国から帰った中納言は、姫を奪われた後の五条の館に着き、歎き悲しむが、桑原に勧められて、梵天王の自筆の判を内裏へ献上する。帝はそれを五条西洞院の天神宮に納められた。

(7)らせん国に着いた中納言が、一人の老人から親切を受ける記事がある。ただし、老人の生国を但馬や丹後とすることは記していない。

(8)婆羅門王が隣国の王に呼ばれる理由を、師子・象・虎を退治するためとする。

(9)らせん国から逃げ出した中納言と姫宮を助けるのは、迦陵頻・孔雀・鳳凰であるが、四天王も現れて婆羅門王を奈落へ沈めたとある。

右の(6)(7)(8)(9)などは、草子系の方に通じる内容をもっていると言える。

さて、そこでC類の〈天理〉の本文であるが、草子系のAB両類と比較すると、次のような相違がある。

(1)冒頭に「そもく、たんこのくに、きれとのもんしゆ、なりあひのくはんをんの、ゆらいをくはしくたつぬるに」という一文がある。これは説経の諸本と同様である。

(2)帝の難題の、伽陵頻と孔雀の条で、A類諸本やB類の〈古活〉のように、二つの鳥を五徳の錦で作ったとする記事が無く、〈伽〉と同様に、梵天国から直接招き寄せたとある。説経や古浄瑠璃も同じである。

(3)同じく難題の十郎姫の条で、参内した十郎姫が、和歌や、琵琶・琴に見事な腕を披露したので、帝が、汝は何故に中将の妻に順うのかと尋ねるという記事がある。これは説経の諸本独自のものである。

(4)次の鳴神の条でも、中将の御内の侍に桑原太郎頼家という者が、宮中で鳴神を静めたので、雷の時には「桑原」と唱えるようになったという記事がある。これも説経や古浄瑠璃の諸本に通じる。

(5)中納言が梵天国へ昇る時、姫宮と別れの歌をよみ交す。これも説経・古浄瑠璃と同じであるが、その歌は、

めをとちて、きみかすかたの、見えされは、せめてなこりの、こゑをきかせよ(中納言)

しはしたに、わかれとなれは、かなしくて、なにとこたへん、言のはもなし(姫宮)

とあって、説経のそれとは異なり、古浄瑠璃の歌に近い。

(6)梵天国から帰った中納言が、姫宮を尋ねて旅に出るまでの間の叙述は、前述のごとく草子系の間にも相違が見られる。A類とB類の〈古活〉では、五条の橋に着いた中納言は、童から我が家の異変を聞かされるが、そのまま内裏へ参り、梵天王自筆の判を献上し、その後、館に帰って姫宮を奪われた跡を見るのであるが、〈伽〉では、中納言は直接我が館に着きながら、すぐに参内し、再び家に戻って姫宮の無き跡を見ることになっている。〈天理〉は、五条の館の南庭に降り立ち、姫宮の消え失せた跡を見て歎き悲しんだ後、参内して自筆の判を献上すると、そのまま清水に参籠することとしている。童から異変を聞くことの無いのは〈伽〉と同じであるが、その後の順序が異なる。これは〈伽〉の叙述に不自然な所のあるのを改めたごとくにも見える。古浄瑠璃は〈天理〉と同じ叙述内容であるが、説経は、帝への自筆の判の献上を、らせん国から姫宮と共に帰国して後としている。

(7)結びの本地を説く条が詳しい。中納言は久世戸の文殊と、姫宮は成相の観音と、らせん国の翁夫婦が鍵取の御前と、それぞれ跡を垂れたとするのは、B類諸本と同じであるが、その後に次のような一文がある。

よろつ代かけてかはらしと、ちきりふかくましますゆへ、ひさしき世と、もんしにあらはして、くせのとゝ申也、されとも、ちきりの中たえて、一たひうきめを御らんすれは、きれとゝも申也、しかれとも、きえんくちすして、二たひめくりあひ給ひ、もとのことく、ふうふとなりあひ給へは、なりあひとは申也、もんしゆしりとは、ちゑ第一のほさつにて、くとんのものにちゑをあたへ、ひんなるものにふくりきをそへ、ことに御身のうへにおほしめしあはせ、恋ちにまよふともからを、みちひかんとの御ちかひ、くわむせおんと申は、しひ第一のさつたにて、三十三身をへんし、しゆしやうのうきめをみることを、たすけんとちかひおはします、すへてほさつのまんきやうは、上くほたい、下けしゆしやうと申て、なにをもつてか、しゆしやうを御身にちかつけ、えんをむすはしめ、まことのみちにいたらしめ、さいとせんとおほしめす、ちかひのほとこそかたしけなけれ、たのむへし〳〵

右のような文は、説経や古浄瑠璃にもなく、〈天理〉独自の部分である。

以上のように、AB両類に対しての〈天理〉の特徴的な部分は、(7)の結びの文を除いて、説経または古浄瑠璃の正本と通じている。しかし、そのほかは全体として見れば、〈天理〉の本文は、説経・古浄瑠璃よりも、草子のA・B両類の諸本の方に近い内容である。九三頁に掲げたA類本の冒頭の一節に相当する〈天理〉の本文は次のようである。

〈天理〉 そも〳〵、たんこのくに、きれとのもんしゆ、なりあひのくはんをんの、ゆらいをくはしくたつぬるに、しゆんわ天わうの御代のとき、五てうの大しんたかふちとて、きこえなたかき人あり、ふつきの身にてましませは、なにはのことにいたるまて、御心にまかせすといふ事なし、されとも、御代をつき給ふへき御子ひとりもましまさねは、これのみ、あけ暮、御ねかひこそ(ママ)なりにける、あるとき、ふうふもろともに、きよみつてらにまふて給ひ、三千三百卅三とのらいはいあり、しゆ〳〵のほつせを参らせ、なむや大ひのくはんせをん、かれたる木にたにも花さくへきとの、御ちかひむなしからすは、我〻ふうふのものとも、しゆくこふつたなき身なりとも、男子にても女子にても、子ひとりさつけてたひ給へ、此くはんしやうしゆするならは、こかねのみしやうたい、三十三まいかけまいらすへし、花のにしきの御とちやう三十

三、是をもかけてまいらせん、三万三千三百卅三のとうみやう、とほしてまいらせん、毎日、千くはんのふもんほん、おこたりなく、三とせよませ申へしと、さま〳〵のくはんをたて、七日七夜こもりゐて、かんたんをくたきていのり給ふ

比較すると、叙述内容はほとんど同じで、文章だけが異なっているという体である。これに対して説経の正本は、一一〇頁に挙げた序文に続いて、

〈仏眼院本〉 偖、本朝の様には、丹後の国、なりあひの観世音、きれとの文珠の、由来を委しく尋るに、仁王五十三世、淳和の御宇、天長年中の事成ルに、若狭、丹後の郡代をは、五条の中将高則と申也、御父は五条の大臣高藤と申奉ル、大臣つねに清水の観世音に祈ひして(ママ)、さつかり給ふ御子なれは、慈悲哀愍の御容身、三十二相を具宛、御器量世にまた類ひもなく、詩歌管絃に至迄、学残せる道もなく、上中下に至迄、いつきかしつき奉ル

というふうになっている。刊本の説経正本もほぼ似た文章である。古浄瑠璃の正本の方は、

〈寛文元年版〉 それ、きよくしてすめるものは。おとろふるといへ共。ついには、天くんのあわれみをうくる。おもくしてにごる物は。必しんりんのせめをのがれず。こゝに、じゆんな天王のみよの御時に。五条の大じんたかふじとて。くぎやう一人おはします。其御子に、四いの中将たかふさとて。たんごの国におはしますが。しいかくわんげんにくらからず。ならびなきふゑの上ずにて、其名のほまれよにたかし。扨又、家のしんかには。くわばらのよりいへ、同より竹とて。兄弟の物共が、ふかくしゆごし奉れば。何のふそくもなかりけり。

のごとくで、やはり説経と同類の文である。共に、〈天理〉を含めた草子系諸本の冒頭にある、申し子の一段が省略されてしまっている。説経の方は、主人公の中将が清水観音から授かった子であることだけは語っているが、古浄瑠璃には、そのことすら記されていない。

このほか、説経や古浄瑠璃が草子系諸本と大きな相違を見せる個所として、梵天国へ昇る龍馬に関する記事や、中納言が羅刹国へ赴く時の記事があるが、いずれも〈天理〉は草子系とほぼ同じ内容である。

こうして見ると、全体としての〈天理〉は、草子系諸本の側に属する内容をもった伝本である。〈天理〉の本文には、七五調の語り物風の文章になっている部分も多いが、段分けの痕跡

は見られず、説経や古浄瑠璃の正本に拠って、それを読み物に仕立てた類の本とは思われない。「毘沙門の本地」における承応三年刊本のように、草子系に対する語り物系の伝本として、はっきり区別することはできないように思われる。すると、この〈天理〉と、説経や古浄瑠璃の正本との関係は、どのように考えたらよいか。〈天理〉が部分的に説経や古浄瑠璃の影響を受けたか、または、説経や古浄瑠璃が〈天理〉のような草子系伝本によって正本を作ったか、二通りの場合が考えられよう。

次に〈天理〉が、AB両類のどの本と関係が深いかという点について見ると、前記の〈天理〉の内容上の特徴の(2)と(6)のごとく、〈伽〉との関係が考えられる。詞章の上では、〈天理〉の本文が全体としてどの本に近いとは言い得ないが、細部には次のような個所が見出される。

〈天理〉 そのゝち、こしの中よりも、十四五はかりの姫宮の出させ給ひて、御さにうつらせ給ひしかは、あたりもかゝやき渡ける、中将なのめにおほしめし、ひめ君に打むかひ、たかひに見えつみえられつ、えんあうひよくのかたらひは、あさからすこそきこえける

この個所のAB両類の本文はかなり違っているが、相当する部分は次のようになっている。

〈筑波〉 しゝう、こなたへとの給へは、きちやうのまに、にしきのしとねのうへにゐたまへり、この世の人とも見えさりけり

〈古活〉 右に同

〈伽〉 しゝう、こなたへとのたまへば、きやう(ママ)のまへ、にしきのしとねのうへにゐ給へり、たがひにみえつ見えられつ、鴛鴦ひよくのかたらひも、あさからずとぞ聞えける

傍線の部分のように、〈天理〉と〈伽〉との間にのみ同文が見られる。

〈天理〉 たゝいまのこくしやこそ、らせんこくの大わう、はらもんといふもの也、わかひめ七さいのころより、たひくのそみたりしかとも、われつゐにゆるさねは、いろくはかりことをめくらし、ぬすみとらんとしたりしを

右の傍線の所が、A類本は「五さいと申とき」、B類の〈古活〉は「二さいのとしよりも」とあり、〈伽〉だけが「七さいの年よりも」とする。

〈天理〉 ほん天わうきこしめし、そのきにてあるならは、下すへしとのたまひて、きんさつに御はんをすへて、出させ給

ふ

A類本は「しろかねのふたに、こかねの御はんをあそはし」とあり、〈古活〉も同じであるが、〈伽〉は「きんさつに御判をあそばし」となっている。

〈天理〉 我、はうへんのちからをもつて百日にをよはんとき、かならすてんによにあはすへし、かへす〳〵とおほせある

A類本は「百日と申さん時」、B類は〈古活〉が「千日といわんとき」、〈伽〉も「千日と申には」とあって、ここでは〈天理〉はA類本と合致する。

〈天理〉 このよし、ちよくし立ければ、うけ給はると申て、中なこんをともなひて、おうちさんたいつかまつる、みやうけんてんのひろにはにて、ふゑをふかせてきこしめし

A類本は〈天理〉と同じ「めうけんてん」であるが、B類の〈古活〉と〈伽〉は「しんけんでん」とある。

〈天理〉 おりふし、ならひのくに、きまんこくの大わうより、らせんこくへちよくしをたてけるやう、しゝ、さう、おほくあれはみて、たみのわつらひおほけれは、かりをもよほすところなり、いさもろともにみゆきなりて、両こくのせいをあはせ、かすをつくしてかりとるへし、御とうしんにおゐては、はや〳〵みゆきなるへしと、のたまひこされたりけれは

ここもA類本には、

〈筑波〉 さるほとに、ならひのくにのみかとをは、りうきうてんわうと申けり、御つかひありて、しゝ、さうなとかおほくて、あまりに物はむあひた、たみのなけきに、御かうありて、狩し給へとそ仰けり

とあるが、B類の〈古活〉と〈伽〉は、

〈伽〉 さるほどに、ならびの国のけいしんこくのみかどは、りうきわうとぞ申ける、はくもんわうへちよくしをたてまつる、うけたまはるとて

とあって、隣国からの招請の理由を述べていない。

以上六例のうち、前三例では〈天理〉は〈伽〉のみと一致し、後三例はA類本と合致する。従って、〈天理〉が〈伽〉とのみ交渉をもつとは言えないのであるが、前三例のように、〈古活〉の本文を承けた〈伽〉が独自に改変したと見られる個所において、〈天理〉との一致があることは、両者の間に特に深い関係があったのではないかと思わせる。

上述のごとくC類とした〈天理〉は、その本文の性格に疑問の多い伝本である。AB類の草子系諸本と骨格を同じくしなが

ら、説経や古浄瑠璃正本との類似点を有する。巻頭に本地を説き起す序詞のあることや、巻末の仏菩薩の利生を説く部分の詳しい所は、本地物としての特徴を見せているが、本文は草子系諸本の中で特に古体と言えるものでもない。草子系の中では最も後出の〈伽〉系統の本を下敷にしながら、説経や古浄瑠璃系統の本文をも取り入れて成ったのではないかとの推測も可能である。

本作の物語は、部分的には「天稚御子」(七夕)「毘沙門の本地」「御曹子島渡り」などと類似した所があり、室町期の物語草子に類例の多い話を接合して、一篇に仕立てた作であろうか。説経と古浄瑠璃の正本には、梵天王の自筆の判を、帝が五条の天しの宮(古浄瑠璃は五条西洞院の天神宮)に納めたとあるが、このことについて、信多氏は「尤の雙紙」上二十四の「稀成物のしなじな」の条に、

又昔、からはしの中将とて、古来不双の美男の公家あり、あまつさへ笛の上手たり、天道につうじて、ぼんてんのあるじ、むこにとり給はんとの勅使あまくだりぬ、今の京、五条てんしの宮これ也、節分の日、あまねくまうずる宮なり

という話の出ていることを挙げ、「古浄瑠璃の正本や説経の正本は、この唐橋の中将の由来と結びつけて、梵天国の説話を増補改作して行ったものかも知れない」と言われているが、右の唐橋の中将の話そのものが「梵天国」とそっくりなのが不審である。もし、こういう話が古くあったとすると、「梵天国」の方が、この話を主要な材料にして成ったことになるが、あるいは逆であるかも知れない。

一体、「梵天国」は、丹後国の久世戸の文殊と成相の観音の本地を説く形で物語られているが、物語の内容は、この二所の本地としての必然性が稀薄なように思われる。草子系諸本では、男主人公の中納言が幼少ではじめて昇殿した時、帝から但馬・丹後の両国(C類〈天理〉は丹後一国)を給わったとある。説経では、その辺の所が省略されているが、巻頭に「若狭丹後の郡代をは、五条の中将高則と申也、御父は、五条の大臣高藤と申奉ル」(仏眼院本。刊本には「若狭丹後の郡代をは」の一句が無い。)とあり、古浄瑠璃になると、「五条の大じんたかふじとて。くぎやう一人おはします。其御子に、四いの中将たかふさとて。たんごの国におはしますが」となっている。説経の、大臣の御子が郡代というのもおかしいが、古浄瑠璃でも、その後

は、中将は都五条の館に住んでいたことになっていて、「たんごの国におはします」が宙に浮いた形で話が進んでいる。どうも草子系をはじめ、主人公を丹後国と何とか関係づけようとしたごとくに感じられる。

ただ、草子系諸本では、中納言が羅刹国に漂着した時、丹後・但馬の者という翁姥が、中納言に宿を貸して労わったとあり、その老夫婦は、後に成相寺の鍵取の御前と顕れたと述べている。鍵取というのは、寺社の御堂や本尊の厨子の鍵を預っている者であるが、実際に成相寺に「鍵取の御前」の名で祀られている神があったのであれば、その由来について何らかの伝承があったのかも知れない。熱田明神の摂社には、源太夫・紀太夫という神が祀られているが、この二人に関して「神道集」の「熱田大明神事」には、

熱田大明神、始テ天下下シ時、記大夫殿ハ宿ヲ借シ上リシ人也、源太夫殿ハ雑事ヲ進ラセシ人也

とあり、文明頃の写本「熱田の神秘」には、

大みやうしんの御うしろみにてまします

と説明されている。「梵天国」の翁姥も、これと同じような役割を物語の中で負わされている所を見ると、本作が久世戸の文殊や成相の観音にまつわる信仰上の伝承と無関係とも言えない。

しかし、本作は物語の筋が変化に富み、新奇な趣向がこらされていて、娯楽的な読み物としての色合が濃い。清水観音の申し子である主人公が、次々と起る試練をきりぬけて、妻との契りを全うするというこの物語は、本地物の通型を充分に備えているが、伝承文芸の性格の強い古い本地物にくらべると悲哀感が薄い。物語の筋の変化と、新奇な画面を見せようとする、いかにも御伽草子的な作品と言うべきであろう。伝本の上から見ても、〈天理〉だけに問題があるが、AB両類の諸本は、上述のごとく、相互の関係をほぼ確実に系譜づけられるもので、大きく見れば本文の系統が単一である。おそらく成立もそれほど古い作品ではなく、本地物の形式を追った、御伽草子としての創作であったと考えたい。

柳亭種彦は「還魂紙料」や「足薪翁記」の中で「梵天国」のことに触れている。

むかしの浄瑠璃に梵天国といふあり、梵天国の冊子によりて作れるもの也（梵天国は御伽ざうしのうちにあり足利の末の代にいでき書か）此浄瑠璃は慶元の頃、河内左内南無右衛門等の語り出しゝが伝りて、ちかく貞享元禄の頃、虎や永閑天満八太夫なんども、浄瑠璃の祝言にはか

ならず此梵天国をかたりけるとぞ（今長唄をうたふものゝをはりに、菊慈童を祝言とするがごとし）

そのゆゑに何にもあれ、もはや是ぎりといふことを、梵天国をうたふといふ諺は今ありて、その浄瑠璃は絶たり（足薪翁記巻之三）

このように、本作は早くから浄瑠璃としても盛行していたらしいが、それも、筋の目新しさや、孔雀・鳳凰などの出てくる趣向が、操りとしても受けたのであろう。それと共に、草子における「文正草子」のような役割を本曲が有していたと伝えている。おそらく草子としての「梵天国」も、そのような祝言性の故に、御伽文庫二十三篇の一として流布したのであろう。